

1 1  
小国616  
学图

教育部  
財団法人  
教育資料  
文部省  
検定済  
教科書  
日本  
新教育  
研究会  
編修

国

語

十二

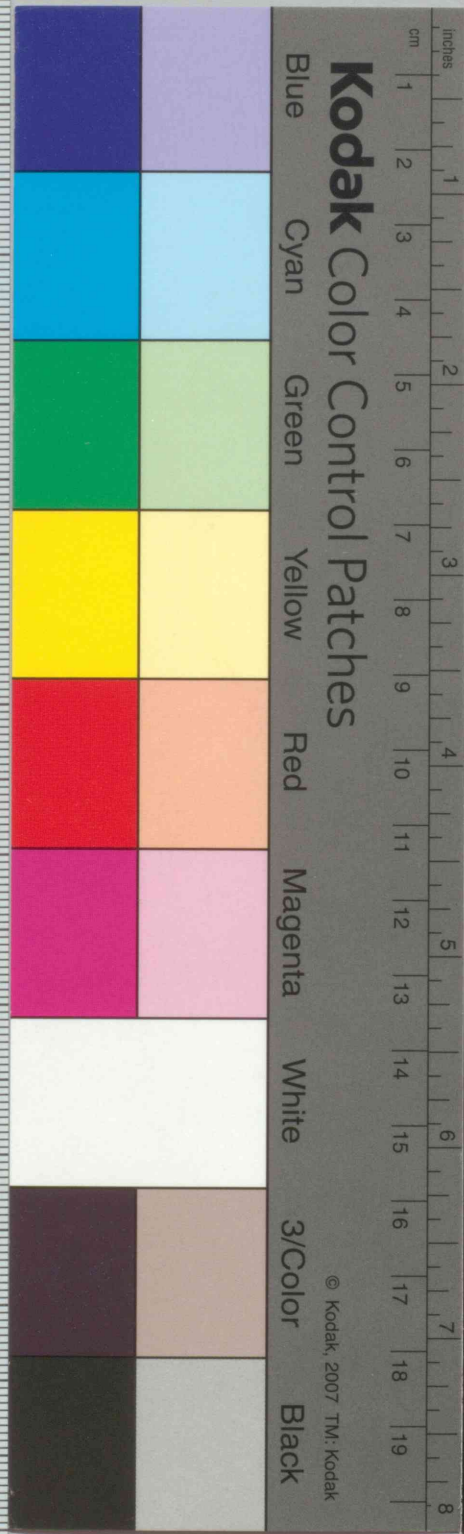


KC  
G16

学校図書株式会社発行

教  
3  
01

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25



Kodak Color Control Patches

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

C  
Y  
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

60381  
教科書文庫  
6  
810  
74-1950  
01304  
49668

寄 贈

教科書文庫

6

810

34-1950

0130449668

昭和二十五年

月

日 文 部 省 検 定 済 小 学 校 国 語 科 用

中央図書館



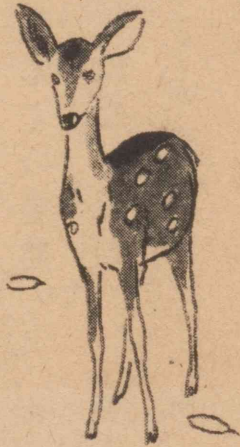
国 語 十二

広島大学図書

0130449668



第六学年用下巻



学校図書株式会社

広島大学  
教育学部図書

広島大学図書

0130449668



もくろく

一 文章の種類

二 すぐれた人々

静かな英雄

デンマークの柱

三 感想文の書き方

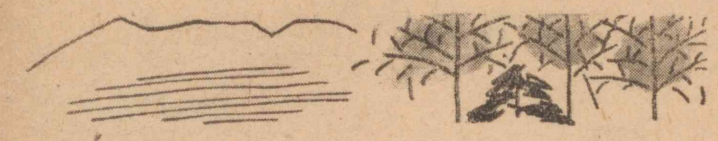
(一) 「じぶんの顔」を読んでの感想

(二) その日から正直になった話

(三) 冬の詩二題

(四) 雪にもまけず

80 76 62 55 54 43 25 24 4



四 卒業

(一) 六年間のしめくくり

(二) 学級文集委員会

(三) 学級文集の中から

五 感謝会の劇(三幕)

学習の手引

漢字

新しく出たことば

(1) (7) (8) (14) 101 97 95 94



## 一 文章の種類

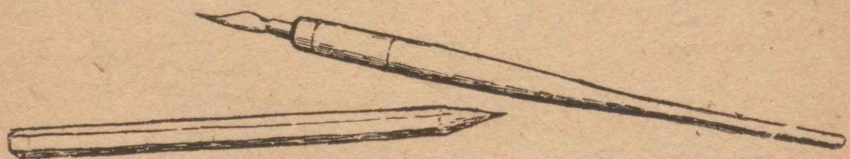
これまで、みなさんは童話・物語・伝記・説明・シナリオ・劇・手紙・はがきなどのさまざまな文章を学んできました。文章には、どんな種類があるでしょうか。この問題に答えることは、容易なことではありません。しかし、動物や植物を分類するようには分けられないとしても、文章も大まかに分けてその特色を心得ておくことは、文章を読む時にも、書く時にも、きわめて有益なことです。文章の種類というとき、みなさんは、すぐ「長い文章と短い文章」「むかしの文章と今の文章」「文語体の文章と口語体の文章」といったちがいを思いおこすでしょう。それも、もちろん、文章の種類にちがいはありま



せんが、それだけでしょうか。

毎朝くばられる新聞の文章を例にとってみても、議論をおし進めている社説の文章と、「いつ」「どこで」「どんなことが起こって」「だれが」「どう言った」といったことが明きらかにされている記事の文章とは、大きなちがいがあることがわかります。さらに、人のようすや心の動きをびょう写している小説や広告の文章になると、一そう大きなちがいがわかると思います。したがって文章の種類は形やすがた(文体)から分けることもできますが、目的や用途からも分けることができましょう。

この課では、さまざまな文章を例にひいて、文章の種類について考えてみましょう。みなさんも、これをもとにして、さまざまな文章をもつと集めて調べてごらんください。



春はアシの芽のめぐむころから、さびれはてた水辺のにおいも、しだいにこまやかになって、やわらかに赤みざした空あいの中を、カリも帰り、ツバメもき、そここの水面からは夜明けなどはうるおいの深い水じょう気が立ち、せきの水音までがおのずとあたたかになると、寒々しいスズメの声がまた、急にうき立つように、ここのやぶ、かしこのかれアシの間からわきてきて、ぽいぽいと、身がらいい四・五わも飛び立ちます。(きたはら・はくしゅう「スズメの宮」による)

ひと区切りの文章がこんなにも長いのもあれば、次のように短いものもあります。

花がさいた。

一つの文章の長短も、文のすがたを考へるときに、目のつけどころとして重要です。「花がさいた」という文章は、短いだけで、単に花がさいたという事実を述べているにすぎません。同じように短い方のなかまにいれられる文章でも、深い考えを表わしているものもあります。

あやまちを改めないのを、あやまちという。

本は心のたべものである。

文章の中にあることばは、辞書の中にあるときよりも美しさを加えていなければならぬ。

格言とか金言といわれているものは、短い文章でありながら、多くのことを深く考えさせる力を持っているものです。

また、文章は、文体の上から見ると、わたしどもが日常使っていることばで書いた口語体の文章と、昔のことばで表わしている文語体との二つに分けることができます。

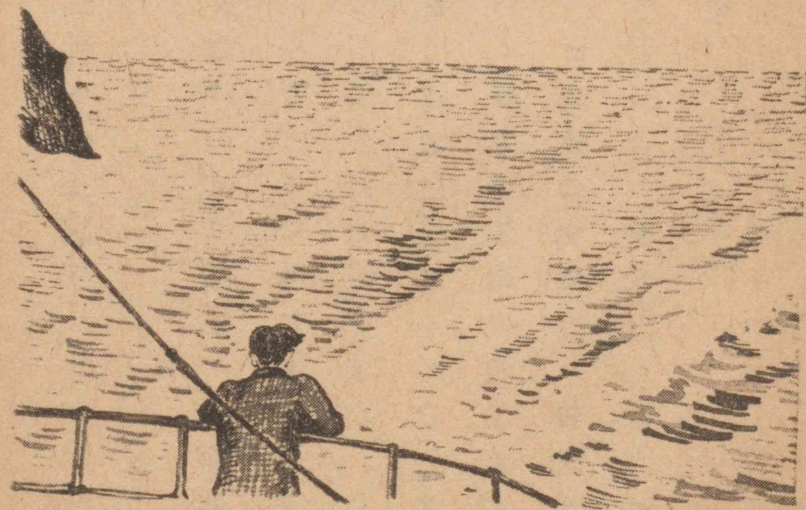
1. どんなにへたでも、たびたび練習すると、じょうずになります。

2. どんなにへたでも、たびたび練習すると、じょうずになる。

3. いかにつたなくとも、しばしば行へば上達す。

1. 2. の例は口語体の文章で、3. は文語体の文章です。文語体の文章は、用語も、語調も、語びも、かなづかいも、ちがっています。文語体の文章は、なおいくつかに分けられますが、これからわたしたちは文語体で文章を書くことはほとんどないと言っているでしょう。今日社会で用いられているのはほとんどと言っているほど口語体の文章です。口語体の文章は、日常生活でひろく使っていることばで書きますから、文章はわかりやすく生き生きしたものを感ぜさせます。

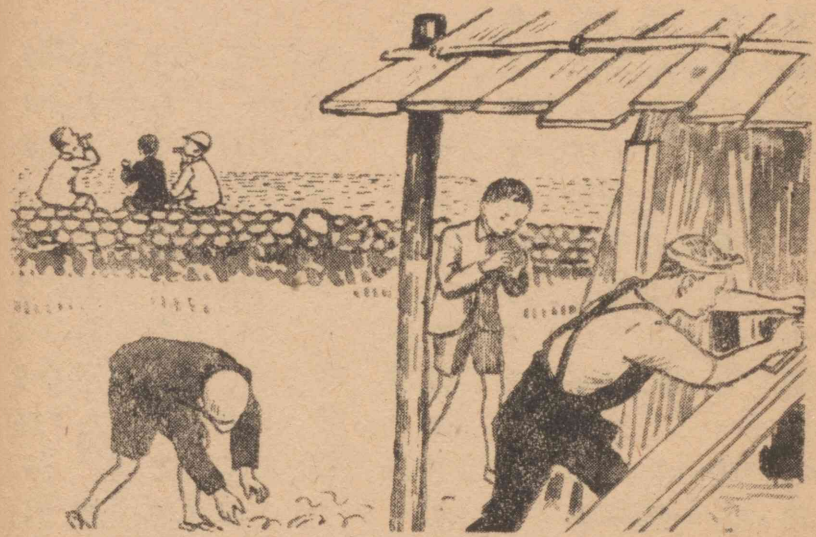
ふなべりに近く白い大きな花輪を  
見るようなのは、われわれの船か  
ら起こす波のあわであった。たち  
まちそのあわが近い波の上へひろ  
がって行って、星のように散りみ  
だれてやがてあともなく消えてい  
った。わたしは遠く青く光る海の  
かなたに無数の魚の群かとも思わ  
れる波の動きを見た。——豊富でし  
かもとらえることのできないよう  
な海。どこを出発点とも、どこを  
結末とも言いがたいような海。わ



たしの目にうつるものは、ただ日の光であった。波のせに反  
射するかげであった。波と波とあい打つてときどきあがる水  
けむりであった。光と熱と、波とはほとんど一つにとけ合っ  
て、わたしは、じぶんのからだまでその中へすわれていく思  
いをした。

(しまぎき・どうそん による)

この文章も、口語体であります。同時に「もののすがたを  
ありのままに写す文」のいい例です。動いている船の中から見  
たひろびろとした海の動きがよく写し出されているではありま  
せんか。このように、自然や人や物について、形・ありさま・  
色どり・位置などを、読む人の目にうかぶようにえがき出す文  
章があります。小説や物語などによく見られる文章です。



子供らは、休み時間のたびに、  
 工事場へいって、かんなくずを拾  
 いあつた。らせん形に巻きつけて、  
 ラツパを作るのだ。そして運動場  
 のはずれの、石がきになつてい  
 かけの上にならんで、目の下の内  
 海に向けて「ピーピー」と鳴らし  
 ながら、音の高さを競争しあつた。  
 とよたは、ふと、「すばらしい」  
 ことを思いついた。おひるの時間  
 に同級生一同に向かつて、  
 「ぼくらは、もう六年生になつた

んだぞ。それなのに、かんなくずのラツパを、ピーピー鳴  
 らしているなんて、あかんぼうみたいではないか。どうだ、  
 ラツパでモールス信号をやりとりすることを覚えられないか。  
 船から船にだって、陸と海との間にだって通信ができるん  
 だよ。」  
 と言つた。

「すると、きみはモールス信号を知ってるのか。」  
 「もちろんさ。」  
 ということで、さつそくとよたが先生になつて、モールス信  
 号の教育が始まつた。とよたは、まず「炭」ということばを  
 教えた。「ス」はピーピーピー（———）で「ミ」  
 はピピピピピ（・・・）だ。つぎは「水」という



ことばである。いま覚えた「ス」と「ミ」を反対に鳴らしてから、ピピ（・・）というにがり点をそえて「ズ」にするのだと教えた。みんなは、とよたを、「モールズ先生」とよんで、熱心に鳴らし続けた。そしてさらに「スズメ」はどうかときくもの、「ミミズク」というのを教えろと言うものなど、いろいろの注文が出た。が、とよたは、そんなにいちどに教えたつて覚えられないよと、その日はそれだけにして切りあげた。実は、とよたも「炭」と「水」のほかは、まだ知らなかったのである。それにはこんなわけがあった。

（まつぎか・ただのりによる）

こんなふうにして、事件がくりひろげられていくのです。こういう文章は、みなさんが、物語や少年少女小説などでよく見

かけるでしょう。これは主としてことがらの発展を時間の進むにつれて表わすのですから「事を述べる文章」と言ってもいいでしょう。

### 事典の文章

#### エスペラント (Esperanto)

人工的に考案した一種の世界語。ワルソ一の眼科医ザーメンホフ (Zamenhof) の創意にかかるもので 1887年に、ドクター・エスペラントという名のもとに初めてこの語を発表した。ロマンス語・ゲルマン語などを基礎として作られたものである。特徴は文法が簡単で除外例がなく、学習が容易な点にある。



エスペラント語を初めて唱えた人。ポーランドの人。ワルソーに学び、その地で眼科医を業とした。言語の不通から生ずる諸民族間の誤解をなくして、人類全体の幸福を増進しようとして1887年国際語エスペラントを創案して提唱し、その普及に努めた。(1859—1917)

このように事典の文章は、できるだけ簡潔に、要点をとらえて、はっきりと書き表わそうとしています。長々とくわしく書き流すよりも、短く要領よくまとめて書くためです。右の例は、小さな百科事典からひいたものですから、いつそう簡単な解説

に終わっています。芸術的な味のある文章と比べてみると、いつそうよく事典の文章の特別なすがたがわかりましよう。

このようなことがらやわけを説明する文章には、筆者の気持ちをいっさい出さないようにして、あいまいな言い表わしかたをさけて、はっきり読む人にわかるように苦心しています。また、「説明する文章」には次のようなものがあります。

ローマ字を学ぶ目あて

(1) ローマ字は現在世界の多くの文化の進んだ国々で、その国のことばを書き表わすために使われている文字である。日本でも、これまで一部の人たちが、国語を書き表わすのに用いてきたが、これからは国際社会の一員となって文化日

本をうち建てるためには、国民みんながローマ字を学んで、  
国語をローマ字でも書けるようにしなければならぬ。

(2) ことばを書き表わすのに、ローマ字はすぐれた働きを持つ  
ている。そしてことばを書き写したり、印刷したりする場  
あいは能率が高く便利な文字である。したがって、ローマ  
字でしるされた印刷物が多く作られるような社会習慣がで  
きれば、社会生活の能率がずっと高められ、国民の文化の  
水準もあがるわけである。それには、ローマ字で読み書き  
ができる能力と習慣をつけるように学ばなければならぬ。  
(3) ローマ字は、わたしたちの国語の特質や組立についての正  
確な知識と、国語を自由に使う能力を得るのに役だつこと  
が多い。ローマ字を学ぶのは、外国語の勉強に役だてるた

めではなくて、国語を正しく使うことができるために学ぶ  
のである。

この文章は、なぜわたしたちがローマ字を学ぶのであるかと  
いう理由と学ぶ目あてを解説したものです。か条書きにして説  
明しています。

説明文の用いられる場あいは、このほか観察・実験・研究調  
査の報告、事実の正しい報道、法律文の説明などずい分多いの  
です。

われわれの祖先がこの国土に住みついてから数千年、台風  
のひ害が年ごとにくり返さされていることを思う時、日本人  
の住居と国土が台風にたえられるものに作りかえられなけ

ればならないのではないか。住居にしても水田耕作にしても古いむかしと比べてはたしてどれだけ進歩しているであろうか。毎年真夏が近づけば、ひたすら台風がじぶんの住居の上にこないことをいのり、きてしまえば天をうらむか、あきらめるかで、何の予防の方法も計画も持たない。これは日本人がしんぼう強いとも評せられるかもしれないが、全くのところ、無気力であり、ちえのない話である。風水害の防止にはきよ大な費用と高度の技術を要するが、それはけっしてどうにもならないものではあるまい。

こんなふうにはじぶんの意見を述べて論を進めていく文章があります。じぶんの信じているところをはっきり述べて、じぶん


の説に従わせようとする文章です。みなさんが、討論会でじぶんの意見を述べるのと似ていきましょう。こういう文章を「意見を述べる文章」と言ってもいいでしょう。

この他、文章を書く目的や用によって、「ぎ式の文章」や手紙・はがき・電報などの「通信の文章」なども挙げられましよう。

右に述べましたさまざまな文章のすがたは、実際の場合あるいは、それぞれ組み合わせられたり、一部に、はいりこんだりして、一そうさまざまになつて現われるのです。また、同一の文章でも、それを書き表わす文字の種類によつて、文章の種類がきまつてきます。

Akatonbo no Hane ga hikatte niemasu.

アカトンボのはねが光って見えます。



「ローマ字文」と「漢字まじりひらがな文」にも書けますし、「ひらがな文」でも「カタカナ文」でも書けます。

今の日本では、四とおりの文字を持っているのですから、四種類の文章になるわけです。よその国には、めずらしいことです。

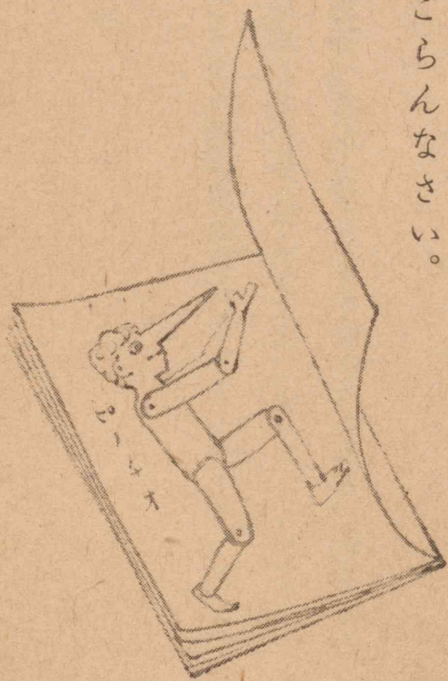
一種類の文字で読み書きができるようになったら、どんなに便利なことでしょう。



さまざまな文章の例を挙げまし

たが、文章の種類はこれだけではありません。

みなさんも、集めてみてください。そうして、いい文章を書けるように研究してごらん下さい。



## 二　すぐれた人々

この課には、静かな英雄——全アメリカ野球界の花がたルー・ゲーリッグと、デンマークの柱——ダルガスの伝記がおさめられています。

「静かな英雄」には、運動に興味を持つ者が、ひとしく心をうたれる、あるものがふくまれています。

「デンマークの柱」は、祖国の現状と比べあわせてみて、国民のすべてが、深く反省させられるお話です。

題を「すぐれた人々」としました。いったい、すぐれた人とは、どんな人であろうのでしょうか。この課をよく読んで、みなさんに考えてもらいたいと思います。問題です。

伝記というのは、すぐれた人の生き方、した仕事を、正確に書いたものです。

もちろん、それに、伝記を書いた人の感げきした心や、尊敬の念がにじみ出るのは当然です。

少年諸君！　大いに伝記を読みましょう。

くだらない本は、くだらない本としてふりすて、よい伝記に読みふけるくらいの少年になってほしい。少年のころ、かずかずのすぐれた人の、すぐれた生き方に接することは、それだけ、あなたたちの生がいを、すぐれたものに近づけることとなります。

よい伝記にぶつかつたら、おたがいにその感げきをわかちあいましょう。

「わたしの尊敬する偉人」を語る会をもつこともよいでしょうし、それを作文に書いて展らんし、読みあうのもおもしろい勉強です。

### (一)　静かな英雄

「ルー・ゲーリッグが死んだ。」という知らせが伝わると、ホフ

イト・ハウスの大統領から、道ばたでキャッチボールをする子供に至るまで、アメリカ全体の人々が、深い悲しみにしずんだ。ニューヨーク市は、じぶんの町のうんだ名一るい手をとむらうために、ラガルディア市長のさしずに従って、かれの死んだあくる日、半旗をかかげた。各新聞は、特に社説をかかげて、かれの一生をたたえ、その死をいたんだ。

その時、ゲーリッグは三十八才であった。ゲーリッグが、ニューヨーク・ヤンキースの、いや全アメリカ野球界の花がたてあつたとはいえ、一野球選手の死が、世間にこれほど深い感動をあたえたのは、なにゆえであろうか。

それは、かれが英雄らしくない英雄であつたからであろう。同じ野球界でも、ベーブ・ルースなどのようなはなやかな型

の英雄ではなく、ふだんの努力と、いつも変わらぬしんせつと、ゆかしい品位を持つ、静かな英雄であつたのである。ニューヨーク・サン新聞の社説は、次のように述べている。

「ルー・ゲーリッグは、ニューヨークのうんだ最大の選手であつた。かれはかつて世界のうんだ最大の選手のひとりであつた。多年にわたってベーブ・ルースの戦友であり、しばしばベーブの後つぎだといわれた。しかしかれはベーブとは全く



ちがつていた。ゲーリッグは静かで、いくらか内気で、まじめでつつましかつた。良心的で、不平を言わず、しんぼう強かつた。かれは生まれつきの運動家ではなく、偉大な野球選手になるためには、ほねをきざむような努

力を積まなければならなかった。かれの人氣も同様だった。かれは大衆を喜ばせるたちではなかった。けん実な美しいプレイぶりが確実にかれを一日一日と古今の大選手の列に高めていったように、かれの美しい性格と、苦境に面した時に表わす勇氣とが、大衆の人氣をしつかりと、つかんでいった。このように、ファンをうならせる強打とともに、かれのつましい態度が、一世の敬愛を勝ち得たゆえんであったのである。かれが死んだのは、千九百四十一年六月二日であるが、その二年前の五月に、かれはすでに小児まひ病のためグラウンドから退いていた。第一線で、はなばなしい活やくを続けているさいちゆうならともかく、グラウンドからすがたを消して二年もたつて死んだ時に、なおあのようにしたわれたのは、かれが人間と

してりっぱであつたことを証明するのである。ニューヨークのうらまち育ちで、その日その日のくらしも不自由であつたころも、かれは快活な、ひがみのない思いやりの深い少年であつたように、名声たぐいのない花がた選手になつた時代にも、かれは持つて生まれた純真さを失わず、ぜいたくな生活におぼれるようなことがなかつた。貪しい時も豊かな時も、いつも変わらなかつた。かれは努力家であつた。それでこそ、野球史上に空前の十五年間の大試合連続出場二一三〇回という大記録をうちたてることができたのであろう。大リーグといえば、春から秋にかけてどのチームも一五〇回以上の試合をする。毎日のようにほげしい試合に出場し続けて、十五年間一回も休まないといふことは、容易なわざではない。そのためには、たえず健康に氣をつけ、





てもらえない。スランプにおちいらないためには、むらのない精神の修練が必要である。ゲーリツグは、このような困難をのりこえて、あのような大記録をつくったわけである。

節制をおこたってはならない。十五年間いつもからだの調子をよく保つただけでも、たいへんなことであるが、それだけではたりない。どんな強打者でもスランプにおちいって、あたらな時がある。あまりあたらなければ、試合に出し

千九百三年六月十九日にヘンリー・ルイス・ゲーリツグが生まれてから間もなく、鉄工所で働いていた父は健康をそこね、もうあまり働けなくなった。ルーが学校に行くようになったころ、父はいく週間も、時にはいく月も働けないことがあった。ルーは学校をやめて、働きに出ようと思ったが、父母は許さなかつた。父母はなんとかしてルーを中学校から専門学校へ進ませたいと切望していた。

ルーが商業学校にはいった時、父はコロンビア大学の寄宿舎の世話人に、母はその料理人になった。ルーは母といっしょに朝早く寄宿舎にいつて朝食のしたくをした。学校から帰ると大学生の夕食の給仕をしたり、あとかたづけをしたりした。勉強は往復の電車の中でしなければならなかつた。しかし、かれ

は根気よく勉強し、同時に野球やフットボールも熱心に練習して、学校の選手になった。

勉強と運動と母の手伝いをうまく調和させることは、なかなかむずかしく、ルーはよく電車の中で時間が気になって、やきもきすることがあった。しかし、かれはけっしてぐちを言わなかった。不平やぐちを言わないことは、ルーの美点の一つであった。

ある日、試合が延長戦にはいると、ルーは心配そうに、おちつきを失って、いらいらしだした。

「心配するな、ルー、こっちの勝だよ。」

と、かんとくはかれを力づけるように言った。

「そりゃ、わかっています。ただ、ぼくは、食事の時に母の手

伝いができなくなるのが、気がかりなんです。」

と、ルーは答えた。そして、次の回に、みごとなヒットでランナーをかえして、試合をかたづけしてしまった。あとでかんとくは、

「ルーがぐちを言ったのは、あの時一度だけだった。」と、人に語った。

千九百二十三年の秋、ヤンキース軍はハギンスかんとくのもとに、全せい時代のベーブ・ルースをまっ先にたて、アメリカン・リーグに優勝し、かんとくマグローウの率いるニューヨークジャイアンツと世界選手権を争い、ついに二年連敗のうらみをそそいで、ジャイアンツをくだし、栄冠をかち得たのであった。しかし、ゲーリツグはその勝利にほとんどあずかることがで

きなかつた。そのころヤンキースの一るいには、名手ウォリー・ピップがいたからである。ゲーリッグは強打者ではあるが、守備がまずいため、小リーグで修業していた。やっとその年の六月十六日、セントルイス・ブラウンスとの対戦に、初めて大試合に出してもらえた。この大リーグへの初出場も、けっして、はなばなしのものではなかつた。もう勝ちときまつた試合なので、ゲーリッグに場所なれをさせるために、ハギンスかんとくが九回目に一るいを守らせたにすぎなかつた。したがって、ただ一つのフォース・アウトを記録しただけで、打順はついにまわつてこなかつた。それはむしろさびしい初登場であつた。

しかし、その秋ゲーリッグは、健康をそこねたピップを助けて一るいの守備をゆだねられたり、ピンチヒッターに起用され

たりして、十二回の大リーグ試合に出て、〇・四二三という高い打率をあげ、ハギンスの期待にむくいた。残念なことに、この秋には、かれはまだ世界選手権試合には出られなかつた。

ゲーリッグの努力は続いた。千九百二十四年もつばら小リーグにまわされていたが、かれは不平を言わず、もくもくと強打ぶりを発揮し続けた。ようやくシーズンの終りに大リーグ戦に十回出場し、打率五わりというまれにみる成績をあげた。しかしその年も次の年もヤンキース軍はすこぶるふるわず、アメリカン・リーグの第二位から第七位へと落ちていった。ルー・ゲーリッグが光を放ちだしたのは、実にこのヤンキース軍が悲運のどん底におちいった時であつた。

千九百二十五年もヤンキース軍はふるわなかつた。六月一日、

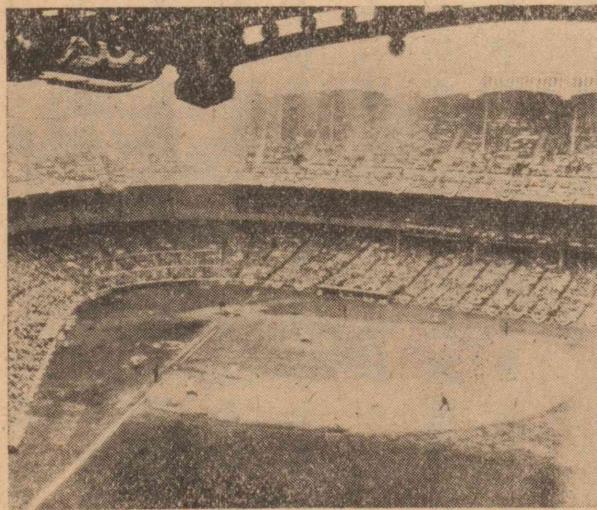
セネターズ軍との試合も負けいくさだった。ゲーリッグは新人遊撃手ワンニガーに代わって、ピンチ・ヒッターとして立ったが、安打を放つことができなかった。スコア・ブックにはごく簡単に機械的に、ゲーリッグ、アウトとしるされただけであったが、静かな英雄の血のにじむ超人的努力の歴史的な第一ページであった。ゲーリッグの大試合連続出場二一三〇回がこの日に始まったのである。

それまで連続出場の記録はヤンキース軍の遊撃手エバレット・スカットの一三〇七回であったが、老練スカットはこの年のヤンキース軍のスランプに際し、おしくも打順から除かれ、新鋭ワンニガーに遊撃の守りをゆずった。その後、スカットの記録を破ろうという野心を持って、多くの大リーグ選手が努力した

が、インディアンスのシーウェル選手だけが一〇〇〇回を少しこえた程度で、他はみなスカットの記録にはるかにおよばなかった。これを見ても、ゲーリッグの偉業がどんなにおどろくべきものであるかがわかるであろう。

そのあくる日ゲーリッグはピップに代わって最初から一塁の手として試合に出るよう、ハギンスかんとくから命ぜられた。ゲーリッグはおどろくと同時に、念願かなって第一線に立つことになったのに感激きした。ゲーリッグはひたむきに努力した。

その年は一二六回の試合に〇・二



九五の打率をあげ二十一本のホームランを飛ばした。守備に弱みのあるゲーリッグをよく指導して、名一るい手にしたてた先ばいピップはもう二度と一るいにかえらなかつた。ゲーリッグは感謝のうちにピップをおしまずにはいられなかつた。このふたりは競争相手でありながら、まことに美しい友情を示しあつた。ピップはじぶんの地位を失うことになるのに、後はいゲーリッグを進歩させるために力をつくし、ゲーリッグは大選手の名を高くしてからも、ピップに対してつつましい態度を失わなかつた。

ルーは全くだかぶることを知らない人間であつた。大選手になつてからも、往來でボール遊びをする近所の子供たちの相手を喜んでしてやつた。シャツ一まいにパンツという身なりで、

無心になつて子供たちと遊ぶのであつた。

千九百二十六年ヤンキース軍はものすごい勢いで、アメリカン・リーグに優勝した。ルーの打順は早くもベーブ・ルースに続く四番にすえられ、おしもおされもせぬ選手になつていた。この年はナショナル・リーグのカージナルスに三勝四敗して、おしくもヤンキース軍は世界選手権を得ることができなかつたが千九百二十七年、二十八年と続いて、ヤンキース軍は世界選手権をにぎつた。しかも選手権試合には二年とも四連勝といふすばらしい強みを示した。それはルースとルーの強打に負うところが多かつた。二十七年にルースはシーズン中六十本のホームランを放つて、ホームランの最高記録を作つたが、ルーもホームラン四十七本でルースの記録にせまつた。その後三年間ヤ

ンキース軍は勝利から遠のいたが、三〇年にはルーは〇・三七九という高い打率で、かれの一生の間の最高記録をあげた。

千九百三十一年と三十四年に、大リーグの選手団に加わってゲーリッグも日本に来た。そして、対早大戦には、だて(伊達)投手のたくみな投球に、また対全日本戦には、さわむら(沢村)投手のすばらしいできばえに、さすがの大リーグの選手も旅行つかれのため難戦におちいったが、二度ともゲーリッグの二るい打とホームランで、番ぐるわせを防いだ。第二回目に日本に来た時は、ルーにとって新婚旅行でもあった。

三十四年を最後にルーはヤンキース軍を去り、あくる年選手生活を退いた。しかしヤンキース軍は三十五年からゲーリッグをキャプテンに、三十六年からマツカーシーをかんとくにし

て、ルーに代わる強打ディマジオをむかえ、三十六年以後ヤンキース軍の黄金時代を作り、四年間続けて世界選手権をにぎった。

しかし、さすがの「鉄人ゲーリッグ」にもおとろえがきた。

千九百三十九年のシーズンが始まると、ルーは意外なスランプにおちいり、打撃は全くふるわず、一るいをカバーする動作もひどくにぶかった。戦友は深く心をいためながら、かれに注意をはらい、かれをいたわった。野球ファンもある悪いやな予感におそわれた。ついにゲーリッグはじぶんが出場し続けることは、ヤンキース軍の成績にかかわることをうれえて、長いはんもの後、かんとくマツカーシーに休場を申し出た。千九百二十五年六月一日の対セネターズ戦から三十九年四月三十日の

対セネターズ戦まで十五年にわたる連続出場二一三〇回という長い系はついに断ち切られた。それはルーにとって、否アメリカ人全体にとつて感がい深い日であった。二一三〇回の試合にかれは四九四本のホームランを打ち、平均打率〇・三四を記録した。しかも満るいにホームランを放つというはなばなしい手がらを二十二回もあげている。

フアンのはかない希望もむなしく、ゲトリッグはもはや公式試合に出なかつた。しばらくの間、キャプテンとしてヤンキース軍の指揮をしているかれのすがたをフアンはさびしく見つめていた。しかし、多年の無理な努力のためかれは小児まひにおかされ、千九百四十一年六月二日、三十八才の働きざかりで、いく千万の人におしまれつつ、この世を去つた。かれは死ぬ前、

特にニューヨーク市長に望まれて、罪を犯した青少年の指導委員に選ばれた。かれの人格の高かつたことを示すものである。

かれは生きていたる間、無数の名よに浴したが、死後も野球発生の地クーパースタウンにある「野球の殿堂」に祭られている。アメリカ野球界始まって十三人目の名よである。この静かな英雄の一生をつらぬくもの——それはつつましい不断の努力であった。

(たかはし・けんじによる)

## (二) デンマークの柱

世界中でいちばん小さい国の一つでありながら、世界中でいちばん幸福な国の一つ。

ひとしずくの石油もわかず、石炭も鉄鉱もほとんど出ず、水

力電気にも全然めぐまれていないというふうには、近代産業の栄える条件が欠けているのに、こじきほもとより、ひどいびんぼう人のいない、もつとも豊かな国の一つ。

トマトやブドウがほとんどみのらず、まんしゅう（満州）でさかんに作られるダイズやトウモロコシさえも花はさくが実はならないというふうには、気候風土にもめぐまれない国でありながら、世界第一の農業もはん国といわれる国。

そのデンマークも初めから幸福な国だったのでなく、今から八十年ほど前、戦争に負けた後などは、まったくみじめな国でした。たびたびの戦争につかれていた上に、敗戦の打撃を受け、国民はすっかり氣力を失い、国としてはもう立ちゆく見こみがないと思われるほど、どんどこに落ちこんだデンマークが、

わずか数十年の間にどうして幸福な平和な国を築くことができただのでしよう。

それには、千八百六十四年ドイツとの戦いに敗れたその日から、「外に失ったものを内に取りかえそう。」と固く決意して、デンマーク復興のために立ちあがったダルガスの方にまつところがきわめて大きいのです。

国と国との関係の複雑なヨーロッパのことだから、イギリスやドイツやロシアの勢力をうまく利用してうかびあがることを計る方がけん明だと考え、投げやりにその日ぐらしをしていようというものも少なくありませんでした。しかしダルガスは齒をくいしばって日夜復興の方法を思いめぐらしました。かれの計画は、デンマーク領の半分をしめるユトランド半島の三分の



一が不毛の荒野とぬま地であるのを開たくして、豊かな土地に  
することでした。これを生かすことができれば、失ったシュレ  
スウイヒ・ホルシュタイン州のうめあわせをすることも困難で  
はありません。

ダルガスはまず、ヒースという小さな木をとり除いて、みぞ  
をほり、すな地には水を注ぎ、ぬま地からは水を流し出し、ぬ  
まの水位を整えて、土地をかんとくすると同時に、どろばいを  
やせた土地にうつして、土質の改良をはかりました。しつっこ  
いヒースを退治するのは、なかなかほねがおれましたが、これ  
までにはさして困難ではありませんでした。難事中の難事は植林  
でした。荒れてやせた土地、寒風のふきすさぶすな地に何を植  
えたらよいか、ダルガスもかねがねいろいろためしてはいまし

たが、いい答が出ませんでした。

ダルガスは研究を重ねた結果、ノールウエー産のアカモミが  
よいという結論を得て、これを植えてみました。なるほど、こ  
れはうまく成長しました。が、どうしたことか、数年たつと、  
この強い木さえやはりかれてしまいました。

ダルガスはくじけませんでした。またまた初めから研究をや  
り直しました。そのうちふと思いうかんだのが、アルプス産の  
小さいヤマモミのことでした。さつそく取りよせて、ノールウ  
エーのアカモミの間に植えてみました。すると、ふしぎなこと  
に、この二つの種類のモミはならんで、いたわりあうように成  
長し、年を経てもかれませんでした。ダルガスは喜びました。  
緑のユトランドを実現しようといふかれの希望はかなえられそ

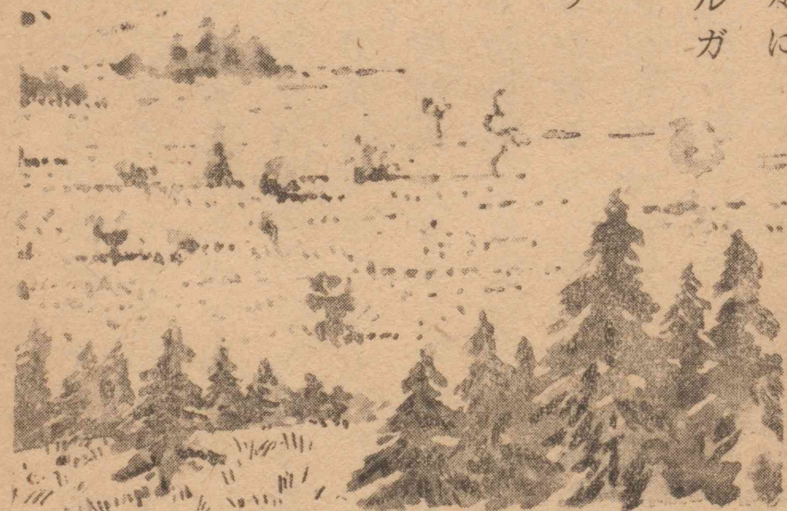
うになりました。二五〇万のデンマーク国民もようやく希望を持ち始めました。

しかし自然はそれほど従順ではありませんでした。モミはつぎつぎと植えられて、緑はひろがっていきましたが、モミはある程度までのびると、そこで成長をやめてしまいました。アルプス産の小モミをならべて植えることによってノールウエー産の大きいモミのかれるのを防ぐことはできませんでした。すくすくとのびていくというわけにはいきませんでした。建築用の材木が得られると、楽しみにして、植林にはげんだ農民たちは失望すると同時に、「ダルガス、



あんたの約束した材木をくれ。」と口々に言っただルガスにせまりました。ダルガスは苦境に追いこまれました。

そのうちダルガスの長男フレデリックがすばらしいことを発見しました。フレデリックは父に似て植物学者の素質にめぐまれていました。わかいだルガスは、大モミがある程度以上に成長しないのは、小モミをいつまでも大モミのそばにはやしておくからであって、もしある時期に小モミを切りはらってしまえば、

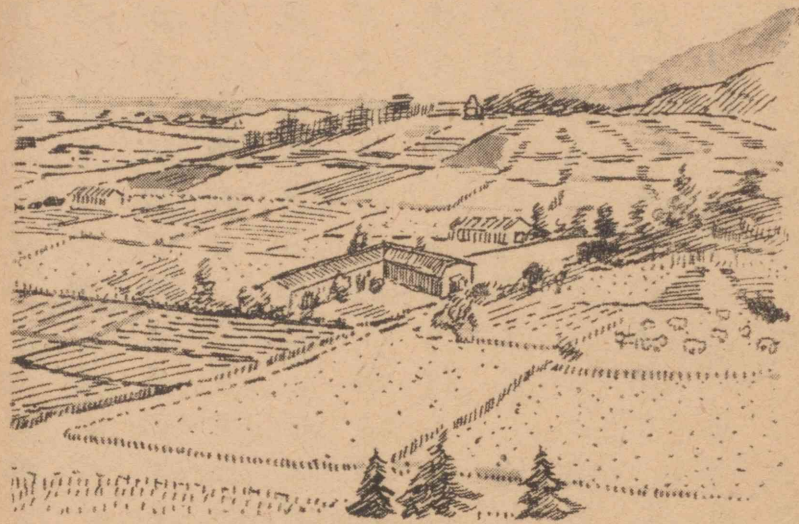


大モミが土地をひとりじめにするからどんどんのびるだろう、  
という結論を得ました。父ダルガスもなるほどと思つて、その  
とおりやつて経過を見ると、小ダルガスの考えどおりになりま  
した。小モミはある程度まで大モミの成長をうながす働きをし  
ますが、それから後はかえつてその成長をさまたげるといふ原  
則が確立されました。ダルガス父子の勇氣は百倍しました。

これはデンマークの復興にとつて、実に大きな発見でありま  
した。古いおとろえたデンマークはわかい科学者によつて救わ  
れたのです。ユトランドの荒地の半分が耕され、そしてその数  
年後、ダルガスが死んだ時には、二五〇〇方マイルという広い  
面積がみごとに開たくされていきました。

植林の利益は材木が得られるといふだけではありません。木

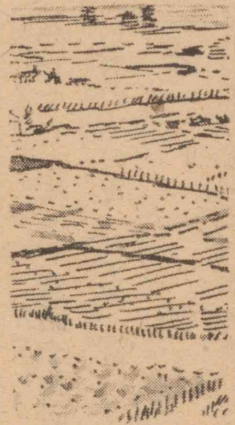
のはえていない土地は熱しやすく、冷えやすいものです。ユト  
ランドもその例にもれず、夏の昼は非常に暑いのに、夜はしも  
がおりるほど冷えるのでした。昼夜の温度が、こゝもちがつて  
は、作物がよくできるわけがありません。したがつて収かくの  
見こみのあるのは、ジャガイモ、クロムギなど少数の作物にす  
ぎませんでした。ところが植林が成功してから後は、氣候がい  
ちじるしくやわらげられ、夏に、しもがおりるといふようなこ  
とはなくなりました。今はコムギやサトウダイコンなどのよう  
なものもできるようになりました。そして畜産がさかんになる  
につれ、それに必要な、し料も十分にとれるようになりました。  
また、モミがしげるようになってから、北の海からふきつけ  
る強い風は防がれ、ふき送られてくるすなも海岸だけでくいと



められました。

その上、毎年水びたしになる作物や牧草が、救われたことも見のがせません。

このようにして、戦争で失ったシユレスウイヒ・ホルシユタインはつぐなわれて余りあるようになりました。その後デンマークは、一度も戦争に参加せず、ひたすら平和な国内建設にとめた結果、最初に述べたように豊かな幸福な国家を築くことができました。こ



のとおりに、ダルガスの植林は多くの実際の利益をもたらしましたが、それにもまして大きいのは、無形の収かくでした。失望して無気力になつていたデンマーク人は、希望をあたえられ、活気のある精神をふきこまれたのです。デンマークの土がよみがえっただけでなく、デンマーク人の心が内からよみがえったのです。こうしてダルガスは、みずからにちかつたとおりに、「外に失つたものを内に取りかえす」ことができました。

この国家復興の大事業が、デンマーク国のどん底の時代にとりかかれ、とうとう実を結んだことは、まことに意義深く感ぜられます。

(たかはし・けんじによる)

### 三 感想文の書き方

感想文を書く場あいは大きく分けて二つあります。一つはお話を聞いた時や、映画や劇を見た時の感想です。もう一つは文を読んだ時の感想です。この課は、どんな形や内容の文を読んでも、うまく感想が書けるようになることを目指しています。

(二)の「その日から正直になった話」は童話、(三)は冬の詩、(四)の「雪にもまけず」は科学的な内容をもったずい筆です。

感想といっても、童話や物語の場あいは、まず話のすじをつかむこと、科学的な内容のものであったら、書いてある順序にしたがって要点をつかむことがたいせつです。

この課に限らず、本を読んだらつとめて感想を書くように心がけましょう。感

想を書くことは、めんどろなことです。でも、感想を書くことにきめて読書を始めめる人の心構えはちがったものになります。心構えがちがえば読みの深さがちがってきます。これをやる人と、やらない人との間には、心の深まり方、読書力の高まり方に、どれだけのちがいが出てくるか、はかりしれないものがあります。

この課をよく読んで、みなさんもひとつ感想を書いてみましょう。

#### (一) 「じぶんの顔」を読んでの感想

ある日、まさおの学級では、先生が次のようなプリントをお配りになって、「きょうは感想文を書く勉強をしてみましたよ。このプリントの文章をよく読んで、感じたことや考えたことをまとめてごらん。」とおっしゃいました。やがてみんなは一心にプリントの文を読み始めました。

○ じぶんの顔

人間の顔はどれもこれも、いや、だれもかれもみんなちがっている。リボンの色を変えるとかなんとかしなれば見分けがつかないといわれるふたごだって、「似たりや似たりウリ二つ」ということばもあるとおり、ひどく似ているというだけで、まるつきり等しいということはない。西洋人の顔はどれを見ても同じようで見分けがつかないという人もあるけれど、それは見えないというちのこととで、しろうとが見ては、



ただ長いばっかしのウマの顔も、うまあきんどの目には、ちゃんとちがって見えるという話を聞けば、なんでもない。



それは、ともかくも、現在、地球上におよそ二十二億という人口があり、過去何十万年のむかしから限らない未来にかけて、どれほどの人間が生まれては死に、死んで生まれかされるかしないのに、そのひとりびとりが、みんなそれぞれちがった顔つきをしているということのことを思うと、びつくりしてしまふ。

じぶんの顔は、むかしから今まで、いやじぶんが死んだ後まで、世界じゅうどこをさがしたって二つとないものだと考えると、

二度びっくりしてしまふ。よかれあしかれ、この顔は、人間の歴史の中にただ一つ、ただ一ぺんしか出てこないものだど気がつくど、これはたいへんなものだと思わないわけにはいかない。

それから、人間は、どんなにじぶんが、ふしあわせに生まれても——たとえば、びんぼうだの、からだが弱いだの、頭がよくないだの、親がないだの、そのほか、言うに言われないような苦しい目にあつていても、しあわせな人を見て、

「ああ、あの人のようになりたい。」とは思つても、  
「あの人になりたい。」とは思わないようだ。

どんなに、人をうらやましく思つても、じぶんというものをなくしてしまつて、他人そのものになりたいとは思ふことができ

ない。どこまでもじぶんはじぶんでありながら、そういう、しあわせな人、りっぱな人になりたいと思ふのだ。

いくら野球の選手になりたくつても、ベース・ルースやゲーリッグそのものになりたいという人はないだろう。「ぼくはゲーリッグになるんだ。」と言つたつて、それは、「ゲーリッグのようになりたい。」ということだ、このじぶんをなくしてしまつて、ゲーリッグのからだの中へはいつてゲーリッグという人間になつてしまいたいということではないはずだ。

「天上天下ゆい我独尊」とおしゃかさまはおつしやつたそうだけれど、これは、この世の中でじぶんひとりがえらいというのではなくて、この世の中にじぶんという人間は、ただひとりし

かいないのだから、だいにしなくてはいけないぞという意味ではないかと思う。

これはどんな人間にだってあてはまることで、ひとりの人の顔が地球上にただ一つしかないことを考えあわせればすぐわかる。

どんなに人のことをうらやましく思っても、じぶんをその人ととりかえてしまいたいとは思わないだろう。これは、ふしぎのようでもあり、ほんとうのことでもある。

顔がちがうと同じように、だれにでも、その人でなければ持つていない才能があるはずだ。サクラにはサクラの花がさき、ハコベにはハコベの花がさく。だれでも、じぶんの花をさかせることができるはずだ。またさかせなければならぬ。

どんな顔でも、それは世界に一つしかないじぶんの顔だ。はずかしがることも、いばることもない。はずかしいのは、ただじぶんの花をさかせるための勉強や、努力をしないでなまけることだ。

(きうち・たかねの文による)

### ○ まさおの感想

人の顔はひとりひとりちがうということについては、わたしもこれまでに考えてみたことがあった。でも、じぶんの顔が、むかしから今まで、いやじぶんが死んだあとまで、世界じゅうどこをさがしたって二つとないものだという事には気がつかなかつた。ぜったいに二つとないわた







りましたけれど、気が弱いばかりに、うそをついたのです。じぶんでも、うそをつくことは、よくない、ひきょうなことだといふことは知っていました。

「もう、これから、わたしはうそをつかない」と、うそをついたあとでは、いつも少年は心にそう思うのでした。

けれど、また、悪いと思われないような場あいもありました。たとえば、病人に向かって、「こ

しの顔。ふしぎだなあ。世界じゅうにかけがえのないたいせつなわたし。もつともつとだいにしなくてはならない。

この文を読んで強くうたれたことばは、「サクラにはサクラの花がさき、ハコベにはハコベの花がさく。」ということばだ。

勉強し努力することが、じぶんの花をさかせる道だ。

「幸福な人」というのは、ナイチンゲールのように、じぶんの花を思うままにさかせた人のことだと思う。「すぐれた人々」というのは、じぶんの花を思うぞんぶんさかせて、人々のため人類のためにつくした人のことではないかと思う。

(二) その日から正直になった話

あるところに、気の弱い少年がおりました。いい少年ではあ

の間よりも、ずっと顔の色がよくおなりです……」と、言うとき、実際はそうでなくても、病人を喜ばすものである。こんな時のうそは必ずしも悪いのではない。もし、それがいいとすれば、やはり、うそをついていいのだろうか？

「ぼくは、昨夜、ゆうれいを見たよ！」と言って、何か広場の中にあったものを見て、空想にふけたことを、まことしやかに、友だちに話すと、つまらなそうな顔つきをしていた友だちなどが急に目をかがやかしながら、そばへ集まって来て、

「きみ、ほんとうかい……。」と、言うのであります。

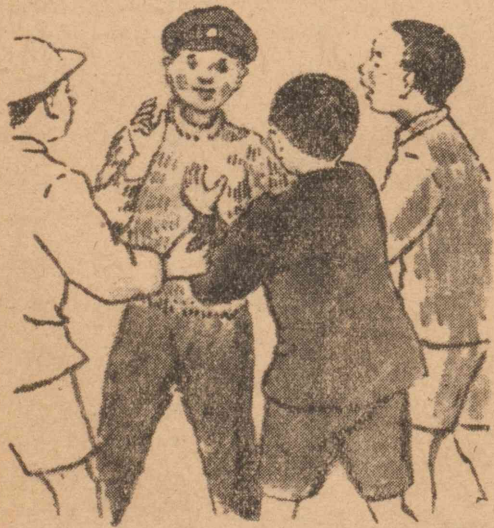
「ああ、ほんとうだ。」と、少年は、熱心に空想したことを、見たことのように話をするのでした。この少年のうそというのは、たいていこうした罪のない、ちよつとみんなを、おもしろから

せようとする種類のものでした。

「じぶんのうそは、けっして、悪いうそではないのだが、それも言つてはいけないものだろうか？」と、少年は、じぶんの心に向かつてたずねました。

「それは、いけないにきまつている。うそをつくのは人間として、ひきょうなことだ。」と、じぶんの心とは思われないような、なんだか年とつた、太い声が答えます。

この時、一方で、それを打消すように、じぶんより、ずっと、ゆうやかな、いきいきとした、



やはり、それもじぶんの心とは思われないうような声が、

「そんなうそは、言ったってさしつかえない。小説でも、童話でも、みんなうそのことをほんとうらしく書いてあるじゃないか……。」と、言いました。

少年は、この二つのちがった、じぶんの心のどちらに従ったらいいか、迷ってしまいました。

「小説は、うそを書くものだということにはわかっているが、おまえの言うことがうそだとわかれば、だれもおまえを信じなくなるだろう。」と、年とった太い声が言いました。

こうして、少年は、常に、じぶんの良心をとがめながら、気が弱いので、つい、みんなをわらわせたり、喜ばせたりしたいために、うそをつくくせを改めることができなかつたのでした。

そのうそは、むじやきなものであつても、それをほんとうにした人は、あとでうそということがわかると、ばかにされたと思ひました。そして、だんだんみんなは、この少年を信用しなくなつたのでした。

「おまえはいい子だけれど、ていさいのいいうそをつくから、悪い子になつてしまつた。」と、少年のおかあさんは言つて、なかれたこともあります。

そのたびに、少年は、自分の悪いくせを改めようと努力しました。気の弱い少年には、なかなかそれができず、また知らずにうそを言つてしまうのでした。そうしたあとでは、いつもこうかいをするのでした。

なんでも長い間に、できてしまつたことは容易なことで改ま

るものでないごとく、こうしたくせも、また、その一つです。

ある夏の日のことでありました。少年は、いつものように、学校から帰ってそとへ遊びに出ました。友だちは、どこへいったものか、往来へ出てみたけれど、だれのすがたも見えませんでした。これは、きっと川の方へ遊びにいったのだろう……

じぶんも、その方へ行ってみようと思ひながら、少年は、往来を歩いて、だんだん村はずれのさびしい方へとやって来ました。道が三方へ分かれるところがあります。ちょうどそこにあった石の上にこしかけて、ひとりの男が、ぼんやりした顔つきをして休んでいました。その男は旅の人のようです。

少年が歩いて行くと、旅人は、にっこりとわらいました。少年は、やさしい、どこかのおじさんだと思つくと、急になつかしくなりました。

「おじさんのおうちは、遠いところなの？」と、少年はききました。こんな、やさしいおじさんが、もし近くに住んでいるなら、さびしい時に遊びにいきたいと思つたからです。

「遠いとも。汽車に乗ったり、船に乗ったりしなければいけません。遠いところなの……。」と、旅人は、少年の顔を見てわらいながら答えました。

そう言つて、旅人は、思ひ出したように、両方のたもとをさぐり、またふところなどをさがし、弱つたなというような顔つきをしたのです。

「おじさん、どうしたの？」と、少年は、旅人の前に立ちながらたずねました。



「たばこをすおうと思ったが、マツチをどこかへなくしてしまつた。……」と、旅人は答えました。「マツチがないの？」

「このへんに、たばこや、マツチを売る家はないかしらん……。」と、旅人は言いました。

「売っているところはなないけれど、ぼく、マツチを持って来てあげよう。」と、少年は言いました。

旅人は、少年のことばを聞いて、うれしそうな顔つきをしました。が、

考えながら、

「おじさんは、日のくれないうちに、また遠くまで歩かなければならないのだ。ぼうのおうちはよほどあるだろうから、たばこをすうのをがまんしていこう……。」と言つたのです。

少年は、目をかがやかしながら、「すぐに持って来てあげよう。」と言つて、あちらへ向かつてかへてきました。

旅人は、少年のしんせつを無にしてはいけななと思つて、だまつて、ほおえみしました。そして、そのうしろすがたを見送つていたのでした。

少年は、近くに友だちの家があるから、そこへいって、マツチを借りて来ようと思ひました。いっしょうけんめいにかけて、

森を曲がると、友だちの家が畑の中に見えました。かれは元気づいて、その家の入口まで、息を切らしながらたどりつきました。かれは友だちの名をよびました。けれども返事がない。「いないのだろうか？」と、少年はがっかりしました。

しかし、じぶんは、友だちのおかあさんを知っているから家へはいってたのもうと思えました。かれは、家へはいりました。けれど、みんなるすで、だれもいなかったのです。

「畑へ行って、るすなのだろうか？」

少年は、こうつぶやくと、しかたなしに、その家から出て、こんどは知っているおばあさんの家へ、かけていったのです。じぶんは家へ帰るよりも、まだ、その方が早かったから。

「おばあさん、マツチをかしておくれ。」と、少年は、その家へ

はいるなり言いました。

「マツチかい。さつき、わたしは、目がわるいので、どびんの水がこぼれたの知らずにいたら、マツチがみんなぬれてしまつて、火がつかない……。それはこまつたことをしたな。」

とおばあさんは、目をくしゃくしゃさせながら答えたのです。

少年は、がっかりしました。どうして、こんなまわりあわせになつたのかと思ひました。

それでは、じぶんはあの旅人に対して、うそをつくことになつてしまふ。旅人は急いでいるのだ……。と、思うと、少年は、とうとうじぶんの家までかけていって、マツチをにぎつてすぐに旅人のいるところへ走っていきました。

旅人は、かなり長い間、少年のもどつて来るのを待っています。

した。けれど、どうしたことか、なかなかもどつて来ませんでした。

「なんといつても、子供の足だからな。」と、旅人は言いました。そして西の空をながめました。夏の日はいつしか、かたむきかけていたのであります。

旅人は、だまっていくのはわるいと思つて、

「おそくなるから出かけますよ。ぼつちゃんのごしんせつありがたく思います。旅人より。」と書いて石の上に残して去りました。

少年は、ついおそくなつて、旅人にうそを言つたと思われはしないかと心配しながら走つて来てみますと、もうそこには旅のおじさんはいませんでした。

少年は、石の上に残してあつた紙きれの文字を見ると、旅人は少年の言つたことをけつしてうそとは思わなかつたばかりか、深く心に感謝していたことがわかつたのです。

このことは、少年の心を深く感動させました。もうじぶんは、けつして、うそを言つてはわるいと思ひました。

そして、正直というものは、かならず相手を感じさせずにはおかないものだと思つたのです。

この後、少年は正直な、いい子になりました。

(おがわ・みめい「つのぶえをふく子」による)



(三) 冬の詩二題

冬のさなかの白いものは 何でしょう  
つめたい雪とあられ しも 氷

はこの中のウサギ  
おねえさまの外とう シラウメの花  
どれもみな 美しくかがやいている  
わらっている

冬のさなかの青いものは 何でしょう  
風とささやくタケ ときわ木  
ネギ ホウレンソウ おかあさんの上着

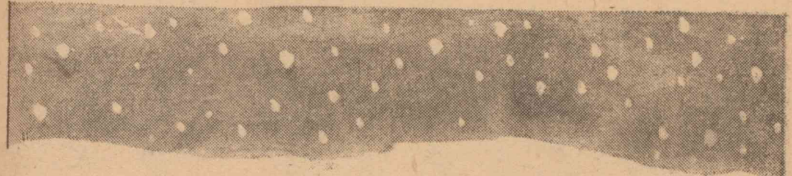
げんきに遊ぶこどもの心  
どれもみな 明かるく光っている  
うたっている

冬のさなかの赤いものは 何でしょう  
火ばちの火 かまどの火 水の中の手  
あなたの手ぶくろ わたしのぼうし  
それからカンツバキの花 アオキの実  
どれもみな あたたかくもえている  
におっている

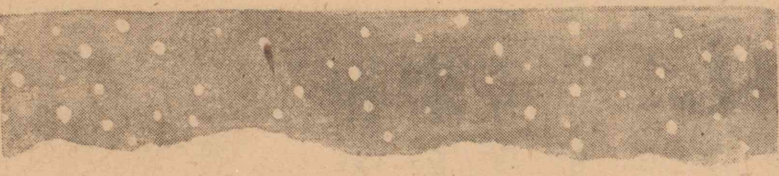
(つばた・はなこ による)







雪がしんしんとふっている  
町のさかな屋に赤い魚青い魚が美しい  
町は人通りも少なく  
ニワトリもなかない イヌもほえない  
暗いので電燈をともしているゆうびん局に  
電信機の音だけがする  
雪がしんしんとふっている  
雪の日はいつのまにか  
どこからともなくくれる  
こんな日 山のけものやどりたちは  
どうしているだろう



あのやさしくておくびょうなシカは  
どうしているだろうか  
シカはあたたかい春の日ざしと  
わか草をしたっていて  
イノシシはこんな日の夜には  
雪の深い山おくから雪の少ない里近くまで  
えをさがしに出て来るかも知れない  
お寺の柱に大きなあなをあけたキツツキは  
どうしているだろう  
みんな寒いだろう  
すっかりくれたのに  
雪がしんしんとふっている

夕げのしたくのしるのにおいがする

(たなか・ふゆじによる)

(四) 雪にもまけず

日本は寒い国である

日本は寒い国だろうか、あたたかい国だろうか。

地図を見ると、南西から北東へずいぶん細長く続いているが、四つの島はどれも温帯からだん帯に横たわっていて、熱帯とも寒帯ともえんのない国である。

しかし、少し調べてみるとわかるように、わが国はほかほかとあたたかくて、くらしよい、申しぶんのない気候だとは決して言われない。それは春と秋のほんのひとときだけであって、

きょうこのごろのような冬はどうであらう。

日本海にそうた地方では、冬じゆう空ははい色で雪がふり続き、太平洋に向いた地方ではお天気はずつとからからした青空であるが、一日じゆうからつ風がふきとおして、火ばちにかじりついていなければならぬ。

日本はやはり寒い国である。このことは世界地図か地球ぎを出してみるとすぐわかる。

青森(北緯四〇度四九分)とナポリ(四〇度五二分)とがほとんど同じ緯度である。

緯度というのは赤道からの遠さをはかる目安である。赤道が〇度で、北極、南極が九〇度となっている。

ナポリというところは、イタリヤの西海岸にある町で、一年

の平均気温は一五・八度である。これにくらべると、青森の気温は九・二度、一月、二月はこれが氷点以下になり、ずっと根雪がある。また、イギリスのロンドンの緯度を、まっすぐ日本の方へたどってみると、千島の北のはしのアライト島の最北たんよりまだ北にあるので、びっくりする。

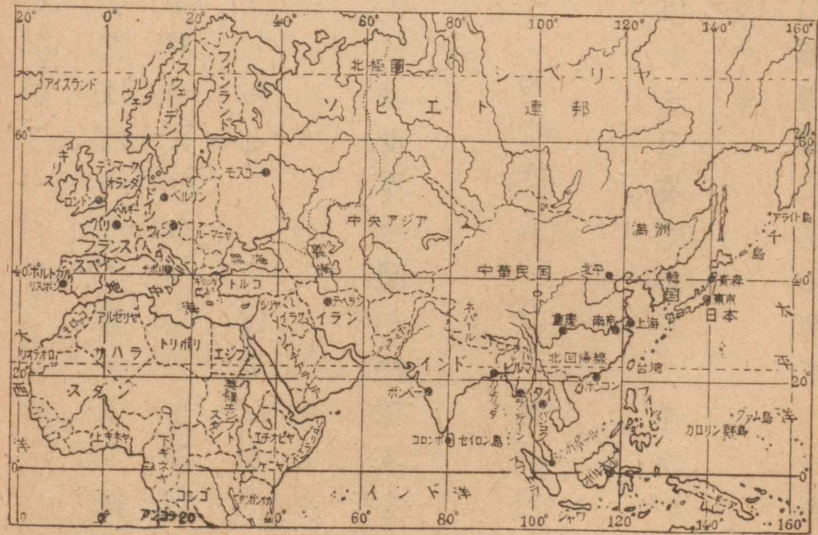
寒くて人が住まず、畑もできないところと、八百数十万の人がうずまき栄える都とが、北極からのへだた

りが同じであるとは、ちよつとほんとうでない気がする。

ヨーロッパがそんなにあたたかいはメキシコわん流という南の方からくるあたたかい海流が、陸地に近く流れているのがおもな理由である。

これにひきかえて、日本では冬の間シベリヤ大陸にできた強い高気圧から、冷たい風がふきだして北西の風が、ほとんど全国をふきまくるのである。

風ばかりではない。この風が日本海をふきわたる時に、海のしめりをはちきれほどにすいこんできて、それが山にぶつかって雪になる。この雪がとつとり県から北海道まで冬じゆうふり続ける。積もるのもたいしたものである。



雪はどれくらい積もる？

南の国では雪がふつてもその日のうちに消えてしまう。残つていても一日か二日くらいだが、山国や寒い地方ではなかなか消えない。その上にまた積もる。積もり積もつて、春まで畑をおおい、道はすっかり雪道になる。これをねゆき(根雪)という。とにかくこの根雪におおわれる地方を、日本の地図の上に考えてみると、北海道と、東北六県、にいがた、ながの、とやま、いしかわ、ふくい、とつとりの各県と、ぎふ、しが、京都、ひょうごの各府県の半分はこのうちにはいる。(それ以外のところでも山地には雪があるが、いまは細かいことは省いて考えてみよう。)左の地図の点々のところが、だいたいそれにあたる。この面積を測ると、およそ二〇万平方キロある。日本の四つ

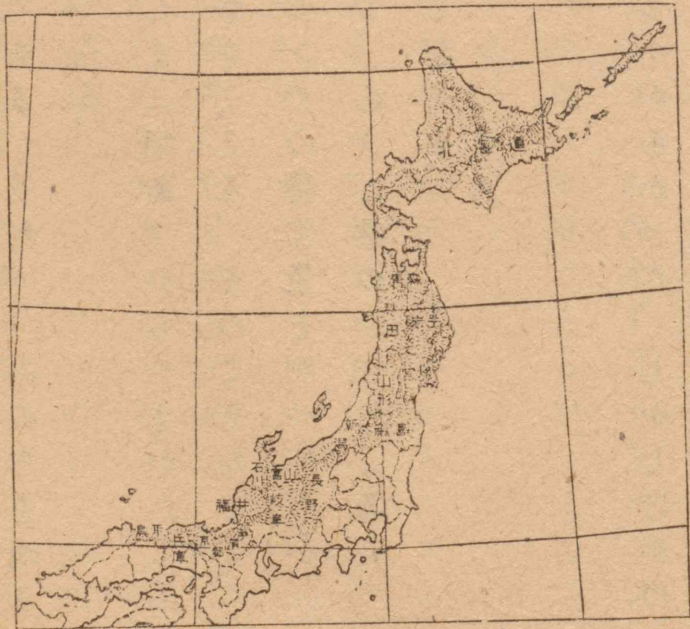
の島の面積は三七万平方キロに少し足りないのであるから、根雪になる地方は日本のうちの五四パーセントほどにあたる。

言いかえれば、日本の半分以上のところは、冬の間、雪におおわれていることになる。

日本がいかに雪国であるかが、これでよくわかるだろう。

それでは積もつた雪のいちばん深かったのはどれくらいか。

雪の深さは測候所で測っている。しかし測候所のあるのはたいてい大きな町である。



いっぽう雪の多いのは山の中である。それで、山の中を通る鉄道の駅で測った積雪量を調べてみる。

おおう（奥羽）本線は、ふくしま（福島）からやまがた（山形）へいくとちゆうで、奥羽山脈をこえる。そのこえたところにあるとうげ（峠）駅で六六〇センチの積雪量を測ったのが、もつとも深い雪のレコードである。あきた県のゆざわ（湯沢）駅でも五五〇センチになったことがある。

#### 冬ごもりする雪国の人々

これでどんなに雪が深く積もるかがわかった。しかしほかの国ではどれくらい積もるものか調べてみよう。

シベリヤ鉄道をもっているロシヤでは最深積雪量が一二〇センチである。北アメリカのシカゴ・ノースウエスタン鉄道では一二五センチ、スイスからイタリヤの方へアルプスの高い山をこえる鉄道でも一二〇センチくらいで、ただオーストリヤのアルベルク鉄道、これもアルプス地方の鉄道であるが、ここでは最深二九〇センチになることがある。

しかし前にしるしたように、日本では五メートルから六メートルの雪の中を汽車が走るのである。とても比べものにならない。ここでもういちど、前の地図を見よう。

点々のうってあるところが冬は根雪になる地方である。そこでこの地方にどれだけの人に住んでいるか調べてみる。

千九百四十六年四月の人口を数えると、これだけのところにござつと二千二百四十万人いることになる。日本の全人口は七千

三百十二万、すると雪国に住んでいるのはその三〇・六パーセントということになる。広さでは日本の五四パーセント、半分以上あるところに、住んでいる人口は三分の一にも足りない。

このことはよく考えてみなければならぬ。

もう一つの例をあげよう。北海道の広さは九州の二倍よりも大きいのであるが、そこに住んでいる人は九州の三分の一にしかなかったらぬ。

こんなふうに雪国に住んでいる人は少ないのである。ひらけていないのである。雪にまけていたのである。

これまでの人は、雪のふる間は三・四か月家に雪がこいをし、わたいのれの着物を着てこたつにあたってじっとしていたのである。こんな雪ではしかたがないとあきらめてくらししていた。ク

マがあなにももって冬みんするのと全く同じにすごしてきた。雪が消えたらはじめて生きかえったように働く。冬の間はすてたような日を送っていた。

それだから着物も食物も家も、冬のこととはまじめに考えないで、その日ぐらしてこえてきた。これでは国の力がのびるわけがない。ゆ快なくらしができないのも、もつともである。

国をひらく、雪国をひらいて明かるくする。これよりほかに道はない。

### 寒さにびくともせぬくふう

これまでは夏だけがほんとうの生活で、冬の間は、そのつなぎの、かりのすまいと思ひこんでなまけていた。このまちがっ

た考え方をすててしまわねばならぬ。

北海道では紙のしよじをたて、ガラス一まいで外をしきつた室にストーブをたいて、たたみの上にすわったり、ねたりしてくらしている。

ストーブをたけばへやはあたたまるが、それはだいたいのストーブの高さから上の空気があたためられるのである。すわったりねたりするところは、下からまわりからはいつてくる冷たい空気がしずんでいて寒い。ストーブのそばにいてもせなかが寒いのはそのためである。ストーブは、こしかけにかけ、しん台にねて、はじめてそのおかげがわかるのである。

あたためられた空気がにげていかないうような建て方に家を改める。一度建てた家は三代も五代も子孫が住むのであるから、

雪にも寒さにもびくともしない家を建てよう。

ロシア人は、日本の人はそまつな家を建てて、一けんの家が建つほどの材木をひと冬の間にあきぎにして燃やしてしまうとわらった。われわれはもういつまでもそんなことをしていられない。

ひところスキーが非常にさかんだった。

しかし、それは雪をめぐらしがる人たちや、都会のわかかい者のスポーツとしてだけであつた。雪ふみ道具としてこの上ないすぐれたものであることがすっかりわすれられていて、農村には少しもはいらなかつた。

それにはこういう事情もある。農村の人の着物やはき物が、スキーをやるのに向かなかつたからである。スキーのしめ具を

農村向きにかえること、いっぽうでは着ているもの、はいているものを改めて、寒さにびくともせぬようにくふうすることが何より必要である。

たべることこそそうである。

少し寒いと、たべようと思って取り出したおにぎりのごはんつぶは、まっ白にこおつてのどを通らない。寒いとたくさんの熱をとりいれなければならぬくらいは、だれにでもわかつていたのに、これまでの人はウメボシ入りのおにぎりをノリでつんだようなものですませてきた。農民ばかりでなく学者の多くもそのなかまだったのである。

強いふぶきにうちかつだけの方は、こんなおにぎりからは出てこない。もつとしぼうとたんぱくしつの多い食物に変えるこ

とである。この四・五年われわれは、三食お米でなくても十分にしのげることも味わってきた。寒いところではできにくく、寒い時にはたべにくいお米などにこだわらず、もつと進んだ食物をとるようになければならぬ。

日本が寒い国であることがわかったら、衣も食も住も、根こそぎ考えを改めて、新しく国をひらきなおすがよい。

なかや・うきちろう（中谷宇吉郎）博士の雪の研究は、さすがに雪国日本にはずかしからぬ世界でもりっぱな仕事であった。しかし、まだまだ雪、ことに積もった雪について研究しなければならぬことは多い。雪と農業、雪と水力発電、都市の除雪と交通、考えればきりがない。科学の力でこの雪の国を、寒い国を新しくひらきなおさねばならぬ。



#### 四 卒業

この課は、学級文集（卒業記念号）の編集の仕方、およびその文集にもる内容について述べたものです。

卒業記念文集を作ること、小学校六年間の生活にしめくくりをつける、もつともよい仕事のひとつです。

これを作る場合にたいせつなことは、まず作る仕事に全員が参加し、ひとりひとりがじぶんたちの文集を作るのだという意識をはっきり持つことです。取りあげる作品にしても、ただすぐれているから取り、つまらない作品であるからするといふのではなく、できるだけ全員の作品が必ず出るようにつとめ、さらにすぐれた作品も、手落ちなく集めるようにしましょう。

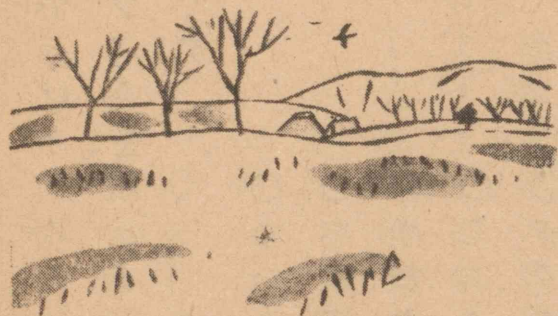
わたしたちも、文集発行の計画をたて、編集委員を選びましょう。

ここに出した「詩」「作文」「すだつ者の声」などは、みな子供の作品です。わたしたちも、どんどん作って編集部へ出し、卒業の春をかざりましょう。

#### (一) 六年間のしめくくり

雪のあいまに黒土が見えはじめ、きのうは  
大空を、鳥が飛ぶのを見ました。

三月をむかえたばかりの六年生のむねに、  
ひしひしとせまってくる思いがありました。  
それは、いよいよ卒業が間近にせまったとい  
う感じと、六年間のしめくくりをりっぱにや  
って卒業したいという気もちでした。  
しげるのクラスで、毎日話題になるのも、



やっぱりそのことでした。しげるのクラスでは、そのためにクラス会を開きました。そして次のようなことを申し合わせたのです。

○めいめいで個人文集を作る。

○卒業アルバムを作る。

○学級文集を作る。

○じぶんの育った歴史をまとめる。

○クラス会の組織を作る。

このよい計画に実を結びせるためには、どうしても、仕事をおし進めていく責任者をきめておくことが必要です。そのためにそれぞれの仕事に委員ができました。

しげるの教室では、さつそくその日から、「相談」「準備」「仕事」といったぐあいに、各部の活ばつな活動がくりひろげられていきました。

## (二) 学級文集委員会

学級文集の委員になった十人は、その日話し合いをして、次のようなことをきめました。

### 1. 文集の内容

#### ◎ 主題 —— 卒業記念

##### (1) 詩

○これまで作ったもので印象深い詩。

○これから作るもので早春の感じや、卒業の感じを、表わしたものを。

(2) 作文——思い出

一年生の時から現在  
に至るまでの思い出  
を長編文で書く。

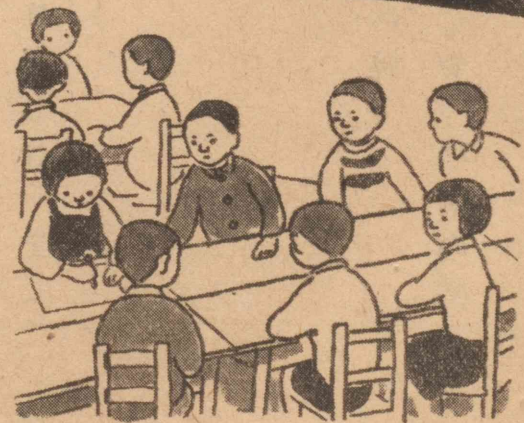
その中から、よいと  
思う部分をとり出し  
て編集する。

(3) す立つ者の声

クラスの者みんな、四十字以内でことばを書く。こ  
れだけは、めいめいで原紙に書く。

(4) 先生のことば

校長先生、担任の先生、その他の先生から、卒業生



2. 仕事のわり当て

に対することばをいただく。

(1) 作品を集め、選び、編集する

井上、田中

(2) カットやさし絵を考え、原紙に書く

山田、上野

(3) 文章を原紙に書く

川上、山本

(4) 校正、印刷

野田、上原

(5) 製本

西山、松田  
全員

3. 仕事の手順

(1) 作品を集めて編集し、カットやさし絵を考える。

三月一日——三月十日

(2) 原紙に書く。

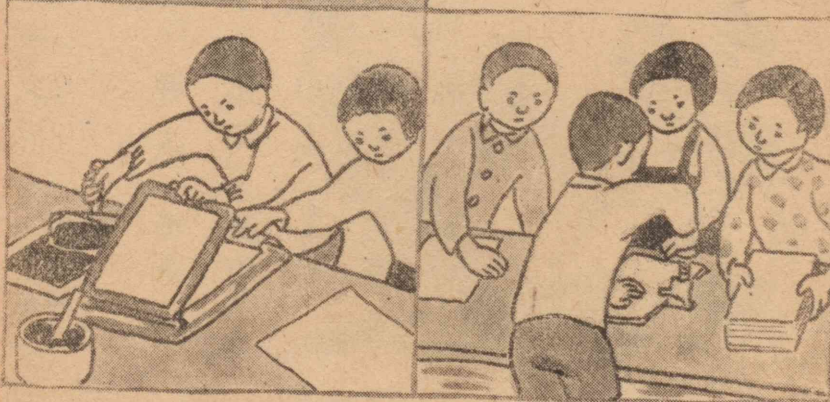
三月十一日 — 三月十八日

(3) 校正と印刷

三月十九日 — 三月二十一日

(4) 製本

三月二十二日



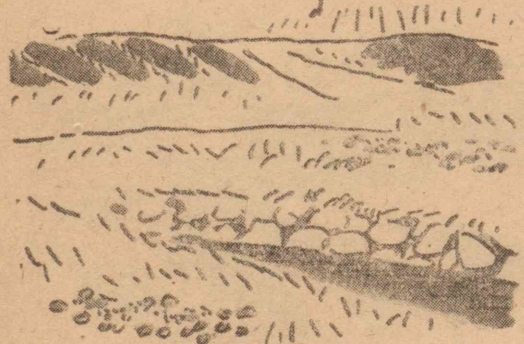
(三) 学級文集の中から

できあがったしげるのクラスの学級文集の中から、少しずつ拾って読んでみることにしましょう。

詩

春のにおい

もうサクラの芽がふっくらと  
ふくらんできた。  
どぶのふちの 小さなかわいい水色の花  
ちよつと さわってみたら  
すぐ花びらが



とれてしまった。  
わたしはそうつと　とつて  
においをかいだ。  
いいにおいはしないけど  
春がもうやってくるにおいがする。  
ほおにつけると　なでてくれるように  
うれしくなった。

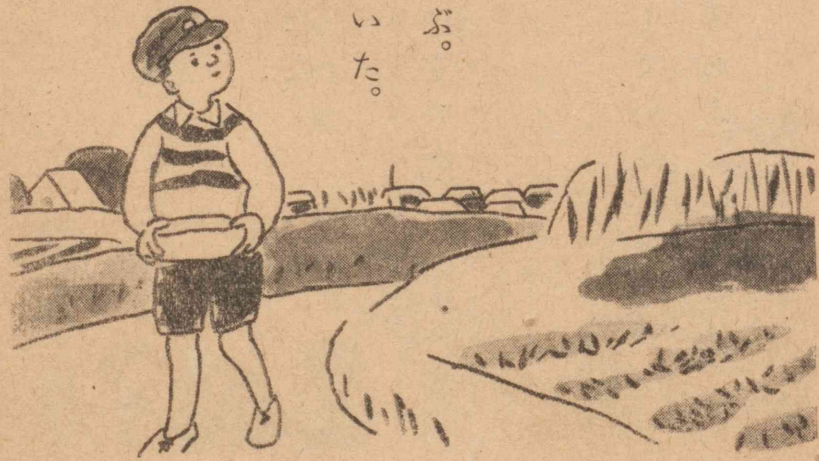
朝

朝、とうふ買いにいった。  
門を出ると、もうムギが青々としている。  
リピユ、リピユ、リピユ、リピユ、



ヒバリが高い空でないている。  
去年の春、

みんなで話しながら畑道をいった。  
「ちよつと、しずかにしてごらん。  
何かないてるね。」  
目をぱちぱちしていた先生が目にかぶ。  
あの時も高いところでヒバリがなっていた。  
ヒバリがなくと春になる。  
まもなく卒業式がくる。  
何だかうれしくなってくる。



江の島

「どこよ。」ときくと、

「ほら、あのクリの木とクリの木の間にさ。」とさす。  
どこだかさっぱりわからない。

ただぼうつとみどりにかすんでいるだけだ。

「どこさ。」

「ほら、あそこさ、あそこに見えるじゃないか。  
きよろきよろさがすとやつと見えた。

ぼうつとかすんだみどりのはしに、

江の島がコッペパンのようにふんわりしている。

「江の島が見えるわよ。江の島が見えるわよ。  
わたしはみんなの方へかけていった。」

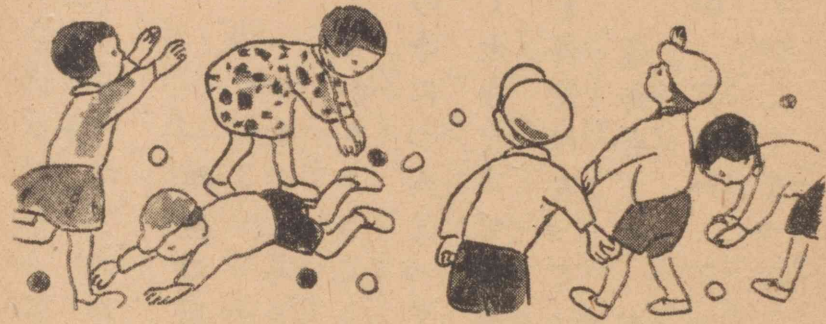
作文

一年生の思い出から

一年生のころを考えてみると、おかしくなる  
ことがたくさんある。入学式の日、おかあさん  
の手につかまって学校へいったっけ。はりきつ  
て大きな声で返事をしたり、ならいおぼえの歌  
を得意になつてうたつたりもした。

運動会では、おウマのゆうぎをした。六年生  
が「アハハ、アハハ。」とわらったので、少しは  
ずかしくなったことを、みようにはっきりおぼ





えている。ぼくはあの時、玉入れをしていてころんでしまい、足をひどくすりむいた。でもがまんしてなかなかかったら、先生からひどくほめられてうれしかった。

冬休みもすぎて大雪がふった時、雪投げをしたら、だれかが大声をあげてないてしまつて先生を困らせた。それがだれだったか、今思い出そうと思つても、どうしても思い出せない。

☆

☆

☆

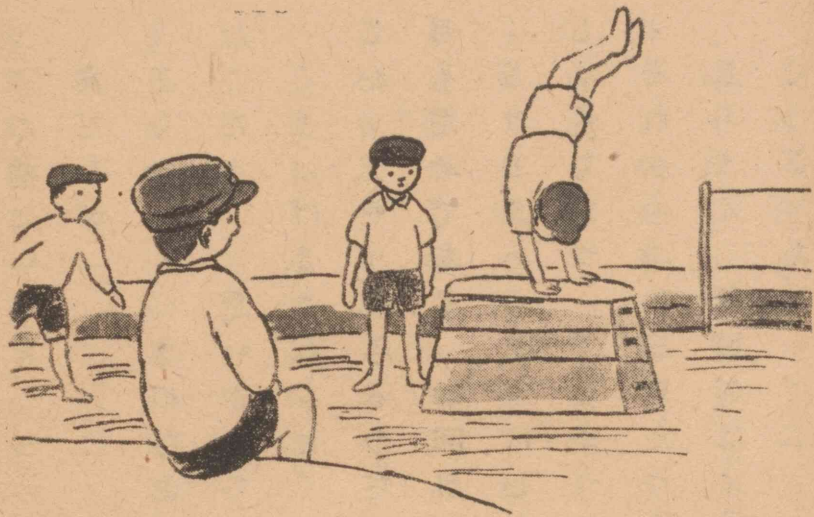
三年生の思い出の中から

イモほり

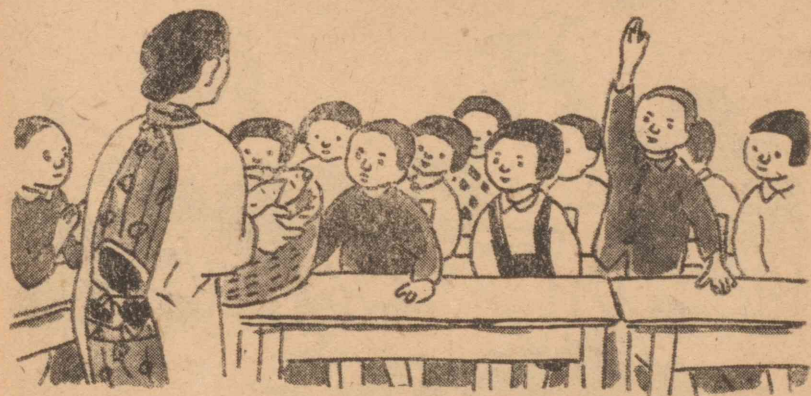
それは秋晴れのすばらしい天気の日だった。その日は午前中にイモほりをして、午後たん生会をする予定だった。

まずかまでイモづるを切つていった。ずばりずばりと気持よく切れる。くわをふりあげて、うんとおろすたびに、もこんと起きた土の中から





ころころとかわいい小イモが出てくる。大イモは、むっくりと起きあがってくる。みんな「キャアキャア」はしゃぎながらほったものだった。ちようどぼくたちがたん生会をやっているところに、学校のおばさんが、ふかふかにふかしたおイモを、ざるに山もりにして持ってきてくださった時は、みんな思わず、「ワアツ」と声をあげてしまった。



五年生の思い出の中から

転回

たいていの人は、くるりくるりと転回ができるのに、ぼくはどうしてもできなかつた。休み時間や放課後、すな場の地面にこしをおろして転回のできる人を見ながらどれだけうらやましく思ったかわからない。  
「よし、やってみよう！」  
と、勇ましくかけていくのだが、バ



ツクの前にいくと、ついこわくなってとびこしてしまふ。  
友だちが

「正ちゃん！ だめだよ。とちゆうでやめっちゃうんだもの。」

ぼくだって、思いきってやったからできるようになっただよ。  
こうはげまされると、またやってみようと思い、ずっと後に  
さがってやってみるのだが、やっぱりとびこしてしまふ。三回  
目もだめである。四回目にまたかけてきて、手をつくが早いか  
くるとまわるようにした。が、かた手がはなれて、ドシンと  
しりもちをついてしまった。

それから二・三日たってからのことである。山田君が、  
「正ちゃん、転回おぼえろよ。ぼくが、ささえてやるから。  
こう言った。」

「うん、ぼくやってみるよ。」

ぼくは、心の中で、「一、二、三。」とかけ声をかけて走ってい  
って、かたをだして、くるとまわるようにすると、ささえて  
はもらったが、とにかくできた。

「もう一回、ささえてね。」

と、後へさがり、「一、二、三。」と言ってかけ出した。くると  
まわると、またできた。

「よし、こんどはひとりやってみるよ。」

いきおいよくかけていく。頭を前に出して早くまわるように  
すると、急にからだが軽くなってひとりでもできた。その時の  
うれしさといったらたえようもなかった。ぼくはびよんぴよ  
んはねまわって喜んだ。その時のうれしさもわすれられないが、

山田君がにこにこして、「よかったなあ」とじぶんのことのように喜んでくれた顔もわすれられない。

### すだつ者の声



○楽しい六か年だった。あの運動場にもこの校舎にも、思い出のかずかすがきざまれている。お世話になりました。

川上正男

○グラウンドと青い空。

山野みきお

○校庭のソテツに残る楽しい思い出。

山田かつ子

○かわいいヤギさんともお別れです。

竹山しげ子

○登校のサクラなみ木がなつかしいです。

有田みちお

先生のことば

あれからもう二十余年は過ぎてまいりました。

わたしにも、みなさんと同じように、小学校卒業のなつかしい思い出があるのです。

そのころは、サクラのつぼみがちらほら開きはじめて、あぜにはタンポポが目さめるような黄色の花をさかせていました。ほどなく卒業式というある日、学校から帰ったわたしは、うら山の松の木のえだにこしかけて、

あおげばどうとしわが師の恩……

と、うたいだしました。歌声は森にこだまし林にひびきわたつ

て遠くきよみずやま（清水山）まで流れていくかと思われしました。六年間の思い出のかずかずがうかんできます。悲しいようなさびしいような言いようのない気持ちにかられます。

その時、ふと恩師よこやま先生のおことば、みんなぐんぐん進んでいくのだ。わたしをのりこえていくのだ。みんなのうしろすがたを見るくらいたのもしいことはない——を思いかえしました。

よし、やるぞ！ わたしはこう心にちかかって、またうたい続けました。

みなさんの前には、希望の空が晴れわたっている。どうぞじぶんにはじないまごころをもって、元気よく前進してください。

それは、クマバチの大軍が勢ぞろいするところだったのさ。”

マーヤ “あのおそろしいクマバチが！ そんなに集まって、どこへいくんでしょう。”

テントウムシ “まっくらなうなり声。鋭くときすまされたあのやり！ さすがのぼくもあたふたやっどここまでにげのびてきたとこさ。いや、こんなところで、ぐずぐずしてはおられん。早くいこう。”

(テントウムシ去る。マーヤ、きつとなって正面を見つめながら)

マーヤ “ああ、わたしはこんなことをしていられないのだ。わたしはおかあさんの教えにそむいて、広い世界にとび出してきた。少しはちえもまし、力も強くなったはずだ。わたしは、帰ってなかまのために力をつくそう。おそろしいクマバチがおそってきたらたいへんだ。早く女王さまにおしらせしてあげよう。”

(ふたいうらから、勢いよく朝の歌のコーラス。)

マーヤ “ああ、もう夜明けた。金色の太陽がかがやくのだ！ きょうからわたしもなかまといっしょ

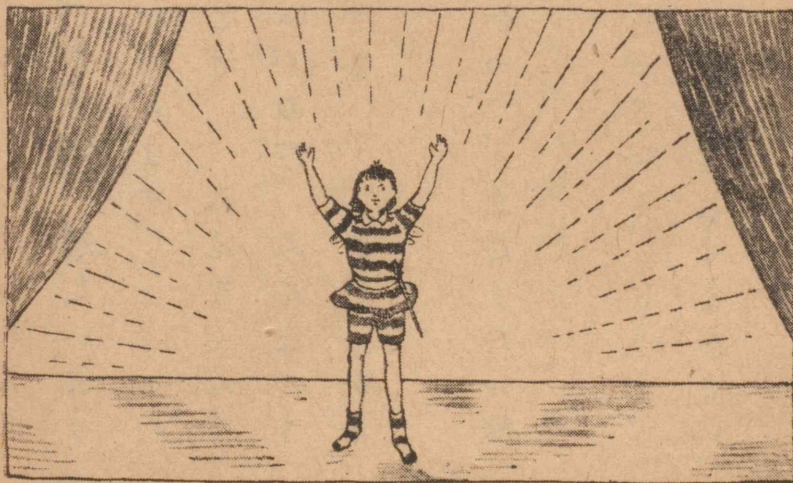
に、いっしょうけんめい働こう。さあ、帰ろう。おかあさんのところへ、なかまのところへ、女王さまのところへ。”

(幕)

(司会者) これでミツバチマーヤの冒険という劇は終わりました。

以上で、予定しました感謝会のプログラムはとどこおりなく終わりました。

では最後に、校歌を合唱して、お別れいたしたいと思います。



んでいく気持、わたしの心は何だか、遠い遠いゆめのお国にひきこまれていくようですわ。

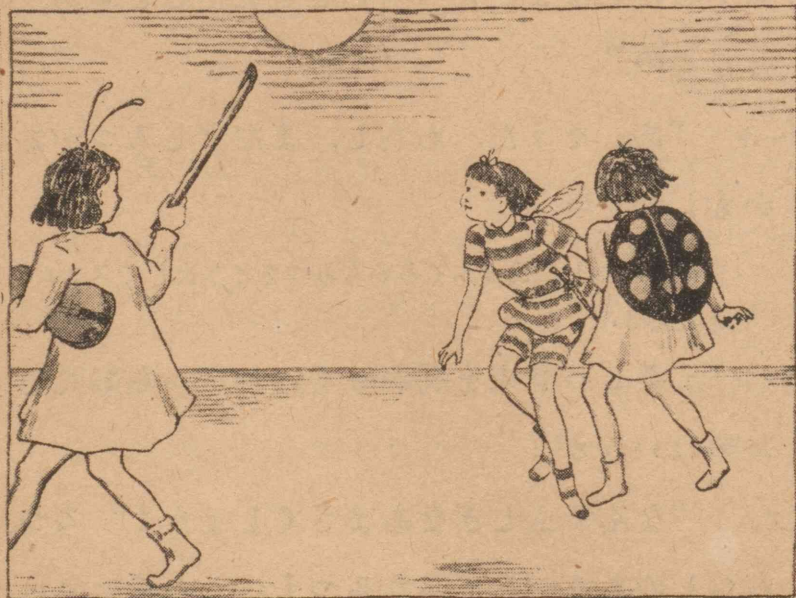
こんな尊いみつを、わたしひとりでいただくのはもったいない。この喜びを、お友だちにも分けましょう。”

マーヤ “あら、もういっておしまいになるの……。”

スズムシ “ええ、でもまたお会いしましょう。”

(スズムシ、バイオリンをひきながら去る。)

(マーヤはむねに手を重ねて、考え深くとたずむ。右手から、テントウムシがかけ出してきてマーヤにぶつかる。)



テントウムシ “あ、これはしっけい。あんまりおどろいて急ぎすぎたもんだから。”

マーヤ “何がころがってきたのかと思いましたわ。あなたはどなた？ かわいいかっこうをしていらっしゃるのね。”

テントウムシ “ぼくの名まえを知らないなんて、けしからん、ぼくはこの原っぱで有名なテントウムシさんさ。ところできみは？”

マーヤ “ミツバチのマーヤです。”

テントウムシ “なに、ミツバチ？ きみがミツバチ？ それはたいへんだ。”

マーヤ “何がそんなにたいへんですの？”

テントウムシ “きみ、きみはそんなのんきなことをしておられないぜ。ぼくは今、むこうの、ヤナギのえだの葉かげで静かな安みんをむさぼっていたところさ。するとあたりが急にざわざわしてきたんだ。”

マーヤ “まあ、どうしたんですの。”

テントウムシ “きみ、おどろいちゃいけないぜ。何と

(スズムシの音—静かな音楽—が聞こえてくる。)

マーヤ “まあ、すてきなこと！ お月さまからくるのかしら、それとも、あのふるえる星のねいろただらうか。”

(スズムシ、バイオリンをひきながら登場)

マーヤ “あら、あらっ！ 今の銀のすずのような音は、あなただったのですか、わたしはまちがえていました。お月さまの音楽だとばかり思っていました。”

スズムシ “お月さまとまちがえられるなんて、光栄ですわ。あなたはどなたでしょう。わたしはスズムシです。”

マーヤ “スズムシさん！ おやさしいお名まえですこと。わたし、マーヤといいます。ミツバチです。”

スズムシ “まあ、ミツバチさん！ あなたが、あの美しい花から花へ飛びまわって、おいしいみつを集めるミツバチさんでしたの。”

マーヤ “ええ、でも……”

スズムシ “なんておうらやましいことでしょう。”

マーヤ “でも、わたしたちのみつ運びはあなた方の美しい音楽とちがって、ただの労働ですもの。”

スズムシ “けっこうではありませんか、わたしたちだって、もっと太い足と強いはねを持っていたら、そんなゆ快なお仕事がしてみたいと思いますわ。”

マーヤ “まあ、そんなにお思いになって？”

スズムシ “ええ、思いますとも。広い野原だの、かぐわしい花園で、あまいあまいにおいにつつまれて働く……美しいお仕事ですわ。それにおいしいみつ！ わたしはまだたべたことも見たこともありませんもの。”

マーヤ “あ、そうだ。わたし、まだ少しみつがあるかもしれない。”

(マーヤ、こしにあるふくろからみつをとり出してスズムシにあたえる。)

マーヤ “美しい音楽を聞かせていただいたお礼です、お味はいかが？”

スズムシ “なんてふしぎなあまさでしょう！ みつ、わたしのあこがれていたみつ！ この舌にとけこ

そうに。まってなよ。いま、そこいらでつゆをく  
んでくるからな。”

(カブトムシ。草の葉からつゆをくみとってきてのませる。)

マーヤ “カゲロウさん、カゲロウさん！ 気がおつ  
きになって？ わたしです。マーヤです。”

カゲロウ “ああ、マーヤさん！”

カブトムシ “まあまあ、よかった。ふたりともけがは  
しなかったかな。飛べるかな。”

マーヤ “ええ、おじさん、どうもありがとう。カゲ  
ロウさん。あなたもだいじょうぶ？”

カゲロウ “うれしいわ、ほら、わたし前のとおりにお  
どれますわ。”

(カゲロウ、むちゅうになっておどり歩く)

マーヤ “おじさん、ああして、カゲロウさんは、ま  
たクモのすにかからないでしょうか。”

カブトムシ “うむ、あの子はおどることよりほか、何  
も考えてないからなあ、どれ、わしがひとつ安全  
な所まで送って行ってやろう。”

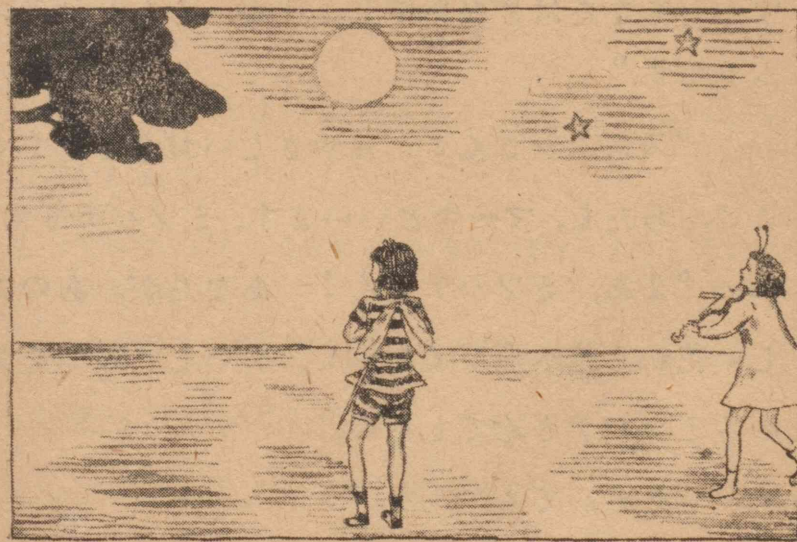
マーヤ “ええ、それがいいわ。”

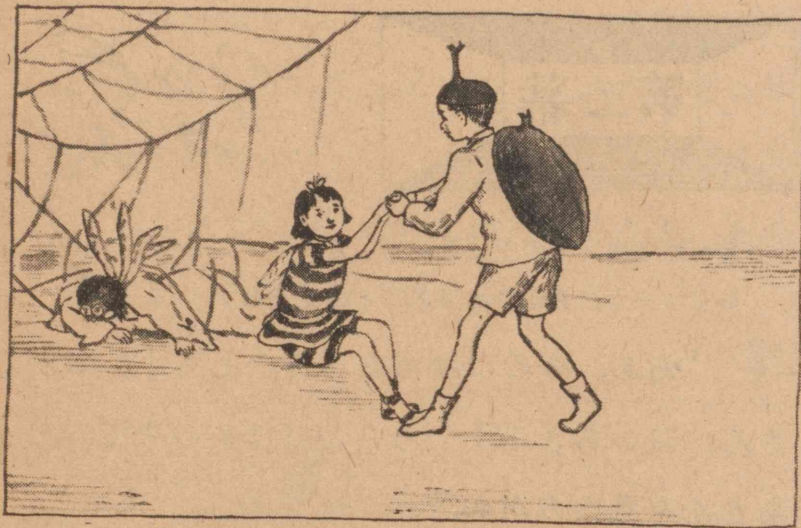
カブトムシ “マーヤさんも気をつけてな。”

マーヤ “カブトムシのおじさん、さようなら。”

(ひとりぼっちに残されたマーヤ、木の上の月に気がつき、う  
っとりとして。)

マーヤ “あの金色に光っているまるいかがみ！ あ  
れがきっと夜のお月さまというものなのだわ。い  
つかおかあさんのお話にあったお月さまなのだわ。  
すると、空一面にこぼれ落ちそうにかがやいてい  
るあの銀色のすなは、きっと、星なのだわ。ああ、  
夜って何て静かな美しいものなのでしょう。”





カブトムシ “おや、どこかでわしの名をよんどるぞ。

このま夜中に。”

マーヤ “おじさん、助けてください。マーヤです。”

カブトムシ “助けてくれ？ いったいだれだね、おまえさんは？”

マーヤ “ミツバチのマーヤです。ここです。おじさんのすぐうしろ、クモのすにかけられているのです。”

カブトムシ “マーヤ？ ああ思い出した、思い出した、昼間あったミツバチのマーヤさんだね。”

マーヤ “そうです。わけはあとで話します。早く助

けてください。おそろしいクモにわたしはたべられてしまうんです。お願いします！”

カブトムシ “おやおや、これはごさいなんだ。昼間おまえさんに、あぶないところを助けてもらったからな。いいところでお礼返しができるというもんだ。マーヤさん、まちなさいよ。わしが来たからには、もうだいじょうぶだ。”

マーヤ “ありがとう、おじさん。だけど、このあみが切れるかしら、ずいぶんねばり強い糸なのよ。”

カブトムシ “こんなあみくらい、ばかにしなさんな。わしのうでは別あつらえのすじがね入りだ。くもの糸の十本や二十本なんの……”

(カブトムシ、クモのすをずたずたにたち切る。マーヤを助けおろしながらカゲロウに気がつく。)

カブトムシ “おや、まだひとりだれやらひっかかっているな。”

マーヤ “あ、カゲロウさんです。早く助けて。”

(ふたりにカゲロウをかかえおろす。)

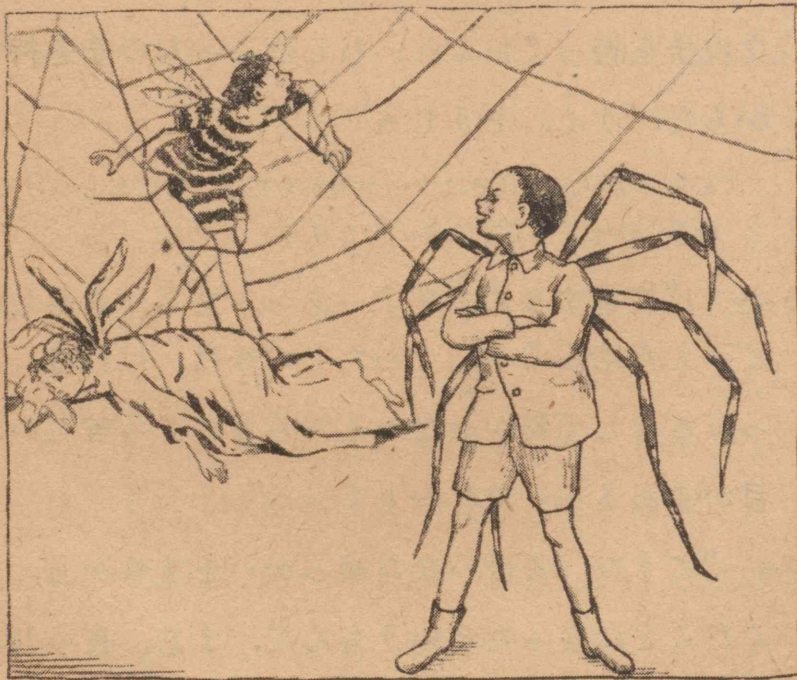
カブトムシ “どうやら気を失ってるようだな。かわい



(夕ぐれが近づいたようにヒグラシの声がする。)

マーヤ “ああ、わたしは世の中に、こんなわる者がいるとは知らなかった。夜のとばりだなんて、みんなうそなのだ、わたしはだまされた。ああ、だれか来てください、だれか……。”

(幕)



(静かな音楽、木の上に月が光っている。クモのすにかかっているマーヤ、目がさめてあたりを見まわす。)

マーヤ “ああ、今のはゆめだったかしら！ おかあさん、おかあさん！ わたしはゆめの中で、おかあさんを見たのだわ。”

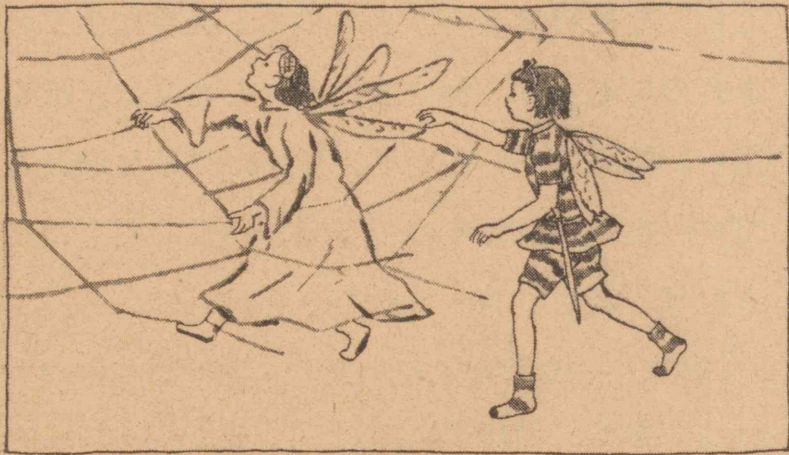
(マーヤなき出す)

マーヤ “おかあさん、マーヤはおかあさんの言いつけをきかなかったばかりに、こんなおそろしい目にあっています。おかあさん、助けてください！ マーヤはこんどこそ、おかあさんのおそばに帰っていい子になりますから。”

(カブトムシ、足音をたてて登場)

カブトムシ “ああ、ひとねむりしたので、だいぶせいせいしたわい。”

マーヤ “あ、そこへいくのはカブトムシのおじさんじゃありませんか。おじさん！ おじさん！”



(マーヤ、すに近づく。クモ、あらわれる。カゲロウは気を失う。)

クモ “おいおい、おまえさんは何をするんだ。ここはわしの家だが、かってなことをされてはこまるね。”

マーヤ “あ、おじいさん、すみません。おるすだと思っただけです。そのカゲロウさんが、おじいさんの家で、何だかたいへん苦しがるので、おろしてあげようと思ったのです。”

クモ “ミツバチさんや、じゃ、こうしよう。わしの家はこれでなかなかもろくできとるから、らんぼうされてはすぐこわされてしまうんだよ。一つ、

家をこわさんように、ふたりでカゲロウをそっとおろすことにしよう。な、それがいい。そうすればわしも安心だし、カゲロウも助かるし、あんたもうれしかろうし、ははははは。”

マーヤ “ええ、ぜひそうしてくださいな。”

クモ “では、おまえさんは、そっちの方から、カゲロウの手を持っておくれ、わしはこっちの手を持つからな。うん、そうじゃ……”

(と言いながら、クモはマーヤのからだを、すにおしつけて新しいひもでぐるぐるまいてしまう)

マーヤ “何をするんです！ あっ、あっ、わたしはどうしたんだろう！ わたしの手は、はねは、あっ、どうして動かせないんだろう。あっ苦しい、目がまわる……だれかきて……”

クモ “どうだ、よけいなおせっかいをするから、とんだことになったというもんだ、まあ、長いしんぼうでもないさ、あしたにでもなったらわしのおいしいごちそうだ。”

(クモに近づく)

マーヤ “おじいさん、こんにちは。わたしは、ミツバチのマーヤです。まあ、なんときれいな織物なんでしょう。おじいさん、その糸を織って何をつくっていらっしゃいますの。”

クモ “うん、これか。これはわしの家さ。夜のどばりというもんじゃよ。”

マーヤ “夜のどばりって何ですの？”

クモ “これから、だんだん日がくれて夜になる。その夜を守ってくれるものだよ。”

マーヤ “まあ、早くそのかがやくつゆのかかったところが見たいわ。”

(ウスバカゲロウ、まいながら出てくる。クモ、すがたをけす。)

マーヤ “まあ、きれい！ 世の中には、どこまで美しいものがあるのだろう。”

(マーヤみどれている。)

マーヤ “あなたはどなたでしょう。そんな美しいまいぎぬをきて、なんと幸福な方でしょう。”

カゲロウ “わたしは、ウスバカゲロウです。でもわた

しは、なぜ時間というもののある世界に生まれてきたのでしょうか。神さまはわたしたちに、ほんの短い、短い生がいしか与えてくださらなかったのです。たいせつな室の一秒間をわたしたちではできるだけ、楽しく美しくすごさなければ……”

(カゲロウ、おどりまわっているうち、クモのすにひっかかる。)

カゲロウ “あつ、助けて、助けてください！”

(カゲロウ、身をもがく、マーヤおどろいてかけよる。)

マーヤ “どうしたのですか。カゲロウさん、そのきれいな着物が破れてしまいますわ。早くおりていらっしゃい。”

カゲロウ “助けてください！ わたしはおそろしいたくらみ、クモのすに、ひっかかったのです。あつ、苦しい！ わたしは死にそうだ。わたしの短いしょうがいが、クモのえじきになるなんて、なんてみじめなことでしょう。”

マーヤ “クモのえじき？ あなたは何を言っているの。ここへおりていらっしゃいな。わたしおてつだいしましょう。”

カブトムシ “ああ、おそろしかった。おまえさんとよ  
けいなおしゃべりをしたばかりに、すんでのこ  
とで死ぬところだった。ああ、目がまわる。”

マーヤ “だいじょうぶですか。おじさん。”

カブトムシ “いや、ありがとう。この目まいさえなお  
れば、もういいよ。おまえさんは、なかなか気が  
きいたいい子だね。

しかし、きょうは家へ帰って休まなくちゃたまら  
ん。”

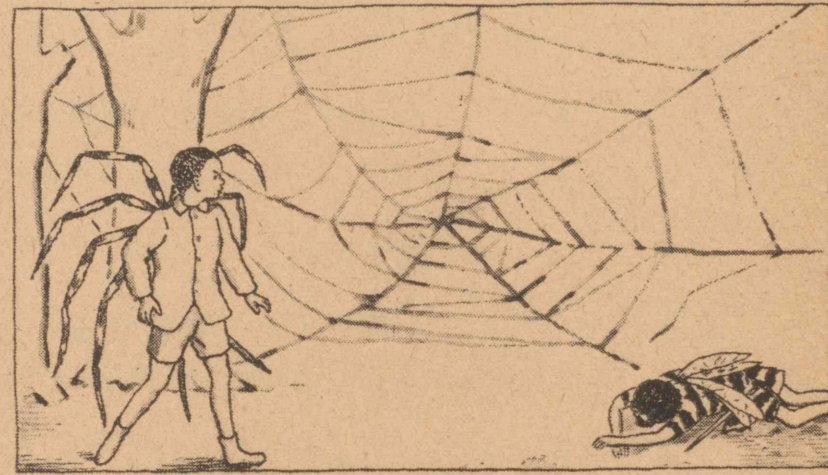
マーヤ “それがいいわ。”

(カブトムシ、マーヤに送られて去る)

(ふいに遠くから風の音——はげしい音楽)

マーヤ “あら、あれは何でしょう！”

(あらした、あらした、というさけび声、だんだんに近づいて  
くる。チョウたちが手をひきあって、おそろしそうにぶたい  
をかけぬけて去る。風の音楽、ますますはげしく、マーヤす  
みにたおれる。)



(木立とはい景の間に、大きなクモのすがはられてある。——  
黒いひもをびょうでとめて作る。——クモ登場)

クモ “ひどいあらしだった！ やあ、わしの家もめ  
ちゃめちゃにされてしまったぞ。こいつは、しゅ  
うぜんにおおほねおりだ。”

(クモ、すをつくろう。マーヤ起きあがる)

マーヤ “まあ、おそろしかったこと！ 天にふきあ  
げられてしまうかと思ったわ。”

が。”

マーヤ “え、そうなんです。でもわたしは他のミツ  
バチと少し変わっているんですって。おかあさん  
がそう言いました。”

カブトムシ “なに、変わりものだって？ どんなに変わ  
っているんだね。ひとつおじさんに顔を見せて  
もらおうかね。”

マーヤ “ええ、わたしも、おじさんの顔をよく見た  
いわ。”

カブトムシ “そうおじさん、おじさんって言うなよ。  
わしはこれでもまだわかいんだぜ。”

(カブトムシは上を見あげようとして、チューリップの葉につ  
かまって身をそらすひょうしに葉がかたむいて、あおむけに  
ころがる。さけび声をあげて手足をもがくが、起きあがるこ  
とができない。)

カブトムシ “ああ、もうおしまいだ。わしは死んでし  
まうのだ！”

(マーヤ、カブトムシのそばにかけよる)

マーヤ “おじさんお待ちなさい。すぐ起こしてあげ

ますから。”

(マーヤはカブトムシのからだに手をかけて起こそうとするが  
重くて起こせない)

カブトムシ “もうやめてくれ、わしはもうだめだ。せ  
めてしずかに死なせてくれ！”

(カブトムシわめく。マーヤあわててかけまわる)

マーヤ “あ、そうだ。いいことがある。”

(マーヤが大きなチューリップの葉につかまって、葉をおりま  
げ、カブトムシの頭の上にたらす)



マーヤ “さあさあ、おじさん。これにしっかりつか  
まってください。”

(カブトムシ、つかまって起きあがる)

マーヤ “おお、高い青空！ かがやく光！ 清らかな空気！（深きゆうしながら）わたしはむねいっぱいすいこもう。ああ、いいにおいがする。きっと、あの金色の太陽がにおうのだわ。あの太陽の下には、きっと美しいものがいっぱいみちているにちがいない。ああ、いきていることはなんてすばらしいことだろう。みつはこびなんて、こんな美しい世界で、どうしてそんなつまらないことが……あ、そうだ。もう1度あのチョウチョのおどりをやってみよう。きっとわたしにだってきる。”

（マーヤ、音楽にあわせておどりまわる。）

マーヤ “わたしはおどれた。チョウチョと同じように。わたしには何だってできるのだ。あの森をこえて、もっともっと広い世界に出かけよう！”

（右手の方からカブトムシが足音高く登場。いかにもひょうきんものらしい口調で。）

カブトムシ “さあ、どいた。どいた。野原の大王さまのおどおりじゃ。”



（マーヤ、チューリップのかけにかくれる。）

カブトムシ “どれ、このすずしい木かげでひと休みするか。”

マーヤ “おじさん、おじさん！”

カブトムシ “わしをよぶのはいったいだれだね。”

マーヤ “わたしはミツバチのマーヤと申します。どうぞよろしく。”

カブトムシ “なに、ミツバチ？ ミツバチがなんで今ごろこんなところでのんびりしているんだね。ミツバチと言えは働きものでとおっているはずじゃ

母 “もうおよしなさいマーヤ。そのかわりミツバチにはチョウチョなんかにはできないことをたくさんもっているのですからね。”

マーヤ “チョウチョにはできないことですか？”

(母、マーヤの手をとって、引きよせる)

母 “マーヤ、お聞き、きょうはおまえが初めて働きに出た日なのですよ。”

マーヤ “ほんとうにそうでしたね、おかあさん。”

母 “おまえは今まではほんの子供だったから、しかたがないけれど、もう他のミツバチといっしょに、みつはこびという仕事にはげまなければならないのです。”

マーヤ “みつはこびですか？”

母 “そうです。それがおまえのだいじなつとめです。だのにおまえは子供のようにおどることばかり考えて……ほんとうにおまえは小さなあかんぼのころから、かわりものでしたよ。”

マーヤ “おかあさん、じゃわたし、どうしても1日中、みつ集めばかりしなければならぬの？”

(母、すわりなおして、しんみりと)

母 “マーヤ、おどれないおどりをするより、おまえ、どんなに幸福かshれないよ。おまえは、もうかがやく太陽も見ましたね。青い空も見たでしょう。そのうちおまえは花のいっぱいさいている牧場も、きらきら光って流れる小川も見るとでしょう。美しい自然の中を飛びまわってみつを集めるなんて、とても楽しい仕事ですよ。”

(マーヤうなづく)

母 “でもね、クマバチにだけはゆだんしてはなりませんよ。クマバチはミツバチにとっていちばんこわい敵です。”

マーヤ “クマバチ？”

母 “あ、おそくなってしまった。おかあさんは、もううちへ帰りますよ。ほかの子供たちが待っていますからね。さ、おまえもなかまのものたちといっしょに、いっしょうけんめい働いてくださいよ。”

(母、マーヤをだきしめて立ち去る。マーヤあたりを見まわす)

太陽がかがやくときには、いつもおどりまわっているんです。”

マーヤ “そう、楽しいでしょうね。でも、おかあさん。わたしたちだって、おどることがあるんでしょう？”

母 “いいえ、ミツバチはおどりません。”

マーヤ “まあ、つまらない！ あんなにおどれたら、どんなに楽しいでしょうに。ねえおかあさん。”

母 “いいえ、ミツバチは働くもので、おどるものはありません。”



マーヤ “でも、わたし、さっきチョウがおどるのを見ているうちに、からだじゅうがはねになってまいだしそんな気がしましたわ。わたしたちにだって、ほらこんなにちゃんとしたはねがあるんじゃないありませんか。”

母 “ミツバチのハネは、おどったりはねたりするようにはできていないのですよ、マーヤ。”

マーヤ “でも、わたしのはねはこんなにやわらかいのだし……”

(マーヤはじぶんのはねを見やりながら)

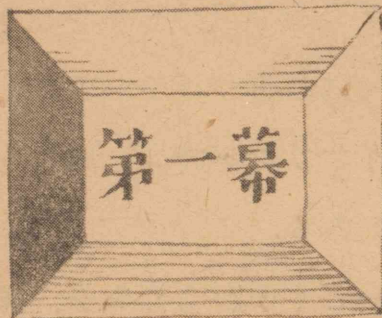
マーヤ “わたし、おどってみよう。おかあさん、ここで見ていてちょうだいね。”

母 “マーヤ、何をするんです。おまえ！ およしなさいよ。他のミツバチに見られたらなんて言われるでしょう！ マーヤ！ マーヤったら……”

(音楽始まる。マーヤ音楽に合わせておどり始めるが音楽はすぐに調子はずしてやめてしまう。マーヤはなき顔になってすわる。)

マーヤ “どうしても、おどれないわ。あんなにすっかりおぼえたつもりだったのに。”





(楽しい合唱につれて幕が開く、ぶたいでは、数ひきのチョウが輪になって、おどっている。やがておどりながら退場。その時、マーヤが木かげから、おどりながら出てくる。遠くの方でマーヤの母の声が出てくる。)



母の声 “マーヤ！ マーヤ！”

(マーヤはいっこう気がつかないように、うっとりとして)

マーヤ “まあ、なんてきれいなんだろう！ あのチョウチョのおどり！ あのまっ白にかがやくはね。やわらかなすきとおるようなからだ！ うちの女王さまより、ずっとずっときれいだわ。ああ、そうだ。あれがきっと、天の使いにちがいない”

(母、ぶたいに出てくる。マーヤはやっと気がついてふりかえる。)

マーヤ “あ、おかあさん！ ねえ、あれが、あのチョウチョたちが天の使いなのでしょう。ね、そうでしょう。なんてきれいなおどりをおどるんでしょうね。”

母 “ほんとうにきれいですね。でもマーヤ、あれはやっぱりただのチョウで天の使いではありませんよ。”

マーヤ “まあ、あれがただのチョウなの？”

母 “そうです。チョウチョはみんなあんまりっぱなはねをもっていて、おどりがじょうずですから、

(ぶたい)

はいけいは、ひろびろとした美しい野原。

ぶたいの左手に2・3本のしげった木立。

中央は、やや小高くなって、1かぶの大きな  
チューリップがある。

緑色の葉、うすもも色のつばみをつけている。

(登場人物)

チョウ——数人。せに白いチョウのはねを  
つけている。

ミツバチマーヤ——黒と黄とだんだらの上  
着に短いズボンをはいて、こし  
にけんをさげて、金色のはねが  
小さい。

マーヤの母——マーヤと同じような服そう  
だが金色のはねが大きい。

カブトムシ——せなかに大きな黒いかぶと。  
(ボール紙で作る)

頭に長いつのがある。

カゲロウ——うすい長いスカートをひき、  
美しいはねをつけている。

スズムシ——バイオリンを持ち、頭にしょ  
く角がある。

テントウムシ——ごく小がらの少女、黒地  
に赤いはんてんのあるかぶとを、  
せおっている。



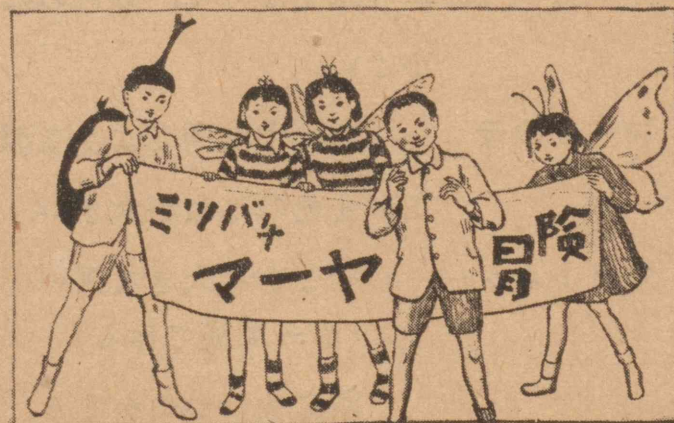
## 五 感謝会の劇

この課は前の“卒業”に引き続いて、卒業式の後で行われた感謝会のプログラムの一つとして、童話劇の“きゃくほん”をとりあげることにしました。きゃくほんというのは劇を実際にやる時の“せりふ”や“動作”を書いたものです。この劇のもとになった童話は、どこの国の子供たちも知っているといつていいほど有名な物語です。この物語の一部分をみなさんが実演できるようにしくんだのがこの“ミツバチマーヤの冒険”です。きゃくほんは、ふつうの文章を読むように読むよりも、登場人物の心もちを表わすように“ことば”に調子をつけて朗読すると興味がわいてきます。登場人物ごとに分けて朗読するといっそう興味がでます。さらに進んで、動作をしながら、朗読してみるといいと思います。そうしたら、きっと実演してみたくなるにちがいありません。登場人物の心もちを表わすように“ことば”の調子をくふうすること、それに適切な動作をつけていくこと、発音とアクセントに気をつけて、みんなによくわかってもらえるようにはっきりと言い表わすことなどが国語の勉強としてだいじです。では場面を心にえがきながら静かな心で読んでみましょう。

(司会者) みなさん、わたしたちの卒業を記念する感謝会も、いよいよ最後のプログラムに近づいてきました。

童話劇“ミツバチマーヤの冒険”劇にしくんだ人は、まき・みずえ、出演は全員卒業生です。登場するのはミツバチ・チョウ・カブトムシ・クモ・カゲロウ・スズムシ・テントウムシなどの小さな動物ですが、みんな身ぢかな人間の心を表わしています。

“ミツバチマーヤ”がどんな冒険をするのでしょう。その冒険のくりひろげられる中に、美しい人間の愛情に心をうたれるものがあると思います。ではこれから始めます。



○文集委員が話し合ってきたこと。

文集の内容

仕事のわりあて

仕事の手順

○次の作品についての感想をノートに書きなさい。

春のにおい

朝

江の島

一年生の思い出から

三年生の思い出から

五年生の思い出から

先生のことば

(2) わたしたちも卒業記念文集を作りましょう。

○まず委員を作りましょう。

○六年間の思い出を書きましょう。

○すだつ者の声を書きましょう。

## 五 感謝会の劇

○この劇をみんなでくふうして実演してみましょう。

○それにはまず、よく読んで、劇全体を十分理解しなければなりませんね。

○次のことがわかっていなければ劇ができません。

1. マーヤはどうしてチョウのまねをしたかったのですか。

2. マーヤのおかあさんが、マーヤのようすを見てどんなふう  
に思ったのでしょうか。

3. マーヤがみつはこびの仕事をいやがったのはなぜでしょう。

4. それぞれの虫の長がどんなふうに表示されているか調べて  
みましょう。

5. 初めて世の中に出たマーヤは、クモのおそろしさを知らな  
かったことが、どんなふうに表示されていますか。

6. マーヤがクモのすにひっかかったのをだれが助けてくれま  
したか。

7. マーヤはどうして、おかあさんのところへ帰る心になっ  
たのですか。

○劇をするまえにどんなことを相談したらいいでしょうか。

配 役

ぶたいそうち

音 楽

ふくそう

○登場人物のせりふを、劇のように調子をつけて読みあってみま  
しょう。

○めいめいで読んでみて心にうかんだことを話し合ってみましょ  
う。

う。

2. その日から正直になった話

読んでお話のすじをつかみましょう。

○この少年はどんな少年でしたか。

○少年の心の中から聞こえる二つの声というのはどんな声でしたか。

○まわりの人々は、この少年をどう思うようになりましたか。

○どうということからこの少年は、正直ないい子になりましたか。

3. 冬の詩二題

はじめの詩

○よく読んで詩の美しさを味わいましょう。

○全体をノートに書いてごらんください。

○この詩に対する感想をまとめてごらんください。

あとの詩

○あとの詩を読んでみましょう。まえの詩とちがった気分になるはずですよ。

○その気分を味わいながら朗読してごらんください。

○この詩を読み味っての感想をノートに書いてみましょう。

○この詩を読んで目にうかんでくる景色を画に書いてごらんください。(この詩の初めの方ならすぐ書けるでしょう。)

○この人はしんと雪のふる夜、どんなことを想像していますか。

○この詩の初めから終わりまで、ていねいに書いてみましょう。

○次のことばを使ってごらんください。

どこからともなく

いつのまにか

○冬の詩を集めてみましょう。

○わたしたちも、冬の詩を作ってみましょう。

4. 雪にもまけず

○“雪にもまけず”を読んで感想をノートにまとめなさい。

○日本は寒い国であるということは、どんなことでわかりますか。

○日本が雪国であるということは、どういうことでわかりますか。

○もっとも深い雪のレコードは?

○日本の国の力がのびないわけの一つとしてどんなことがありますか。

○寒さにうちかつくふうとしてどんなことが考えられますか。

○読書記録を作りましょう。

本の名まえ	著者	ページ数	読み始めた日 読み終わった日	感想

○読書をして感想を書きましょう。

○感想発表会の準備をしましょう。

四 卒 業

(1) 終わりまでよく読んで次のことをはっきりつかみなさい。

○しげるのクラスで話題になったこと。

## 学 習 の 手 引

### 一 文章の種るい

- 読みものの中から区切れの長い文章をさがして書きぬいてごらんなさい。
- 短い味のある文章をさがしてノートに書き集めてごらんなさい。
- 文語体の文章と口語体の文章とどこがちがいますか。
- 子どものために作られている辞書を用いてその文章のすがたを調べてみましょう。
- ものごとを順序正しくわかりやすく説明する文を書いてみましょう。
- 新聞の社説に見られるような意見発表や議論の文を書いてみましょう。
- さまざまな文章をその目的と用とによって書けるように勉強していきましょう。

### 二 すぐれた人々

#### 1. 静かな英雄

- 静かな英雄とはだれのことですか。
- なぜ静かな英雄というのでしょうか。
- ゲーリッグは少年のころどんな子供でしたか。
- 長い間の小リーグは修業時代にゲーリッグはどんな態度を示しましたか。
- ゲーリッグはつつましい、たかぶらない人だったといいますが、

それはどんなことだかわかりますか。

- ゲーリッグはどんな記録をうちたてましたか。

連続出場回数

ホームラン

打率

- 静かな英雄を読んであなたはどんな感想を持ちましたか。
- すぐれた人の伝記を読んで、感想文を書きましょう。

#### 2. デンマークの柱

- デンマークの柱とはだれのことでしょう。
- 八十年ほどまえ、戦争にまけた後のデンマークはどんな国でしたか。
- ダルガスはどんな計画をむねにえがきましたか。
- 難事中の難事である植林に、ダルガスはどんな苦心をしましたか。
- 植林に成功したおかげで、どんな利益がもたらされましたか。
  - 材木      ○気温      ○作物
  - 風        ○水        ○その他
- 実際の利益にもまして大きい無形の収かくとは何ですか。
- ダルガスの考えや仕事についてのあなたの感想を書きなさい。
- これからの日本を作りあげてゆかねばならないあなたは、どんな考えを持っていますか、あなたの考えを書いてごらんなさい。

### 三 感想文の書き方

#### 1. “じぶんの顔”を読んだ感想

- (1) あなたも“じぶんの顔”を読んで感想を書いてごらんなさい。
- (2) あなたの感想文と、まさおの感想文を読みくらべてみましょう。

真 夏.....21  
 まるつきり.....56  
 ま れ.....35  
 まんしゅう(満州).....44  
 満 る い.....42  
  
 水びたし.....52  
 水 べ..... 6  
 見なれ(ない).....56  
 ミミズク.....14  
 未 来.....57  
  
 無にして(する).....71  
 無 気 力.....21  
 むさばって(る).....(43)  
 むっくり(と)..... 108  
 む な し く.....42  
 む ら.....30  
  
 名 手.....33  
 メキシコわん流.....82  
 目 安.....81  
 面した(する).....28  
  
 モールス信号.....13  
 甲しぶん(のない).....80  
 もこん(と)..... 107  
 も ろ く.....(32)  
  
 野 心.....36

やまがた(県名).....86  
 有 益..... 4  
 ゆうかん(な).....65  
 ゆ う ぎ..... 105  
 遊 撃 手.....35  
 優 勝.....33  
 ゆうれい.....64  
 ゆかしい.....27  
 ゆざわ(湯沢).....86  
 ゆだねられ(る).....34  
 ユトランド半島.....45  
  
 用 語..... 9  
 要 領.....17  
 予 感.....41  
 よけい(な).....27  
  
 ラガルディア.....26  
 らせん形.....12  
 ランナー.....32  
  
 リビュウ..... 102  
 リ ボ ン.....56  
 ——領.....45  
 良 心 的.....27  
  
 ルー・ゲーリッグ.....24  
 連 続.....29

連 敗.....33  
 ローマンス語.....16  
 老 練.....36  
 話 題.....95  
 わ め く.....(27)  
 ワルソー.....16  
 ワンニガー.....35

漢 字 ○印は当用漢字です

益 (4) 格 (8) 富 (10) 展 (14) 創 (15) 基 (15)  
 ○礎 (15) ○徴 (15) ○簡 (15) 除 (15) ○諸 (16) 増 (16)  
 提 (16) ○普 (16) 及 (16) 領 (16) 能 (18) 率 (18)  
 技 (20) 拳 (24) ○雄 (24) 興 (24) 状 (24) 接 (25)  
 統 (26) 至 (26) 衆 (28) 態 (28) 証 (29) 純 (29)  
 健 (30) 康 (30) 宿 (31) ○優 (33) 榮 (33) ○冠 (33)  
 ○擊 (35) ○超 (36) ○銳 (36) ○婚 (40) 断 (41) 否 (41)  
 ○殿 (43) 堂 (43) 鉉 (43) 条 (44) 復 (45) 複 (45)  
 ○畜 (51) 収 (53) 義 (53) 未 (57) 我 (59) 圧 (83)  
 ○奥 (86) ○峠 (86) 孫 (90) ○宇 (93) ○吉 (93) 象 (97)  
 ○担 (98) ○松 (99) 製 (99) 君 (110) 司 17 央 18  
 退 18 秒 31

大試合	29	提唱	7	とっとり県	83
大衆	28	ディマジオ	40	とどこおり(なく)(45)	
対戦	34	手がら	42	唱えた(る)	116
態度	28	適切	(14)	とぼり	(30)
大統領	26	鉄工所	30	とむらう	26
大リーグ	29	鉄人	41	ともかくも	57
たかぶる	38	転回	109	とやま(県名)	84
たぐい(のない)	29	天上天下		どろばい	46
たくらみ	(31)	ゆい我独尊	59	どん底	35
打順	34	電信機	78	とんだ(こと)	(33)
たたずむ	(42)	殿堂	43		
だて	40	テントウムシ	(17)	なかや・うきちろう	
玉入れ	106	デンマーク	24	(中谷宇吉郎)	93
打率	34			投げやり	45
ダルガス	24			ナショナル・リーグ	
だんだら	(16)	間	4		39
担任	98	同級生	12	ナポリ	81
たんぱくしつ	92	とうげ	86	南極	81
		動作	(14)	難事	46
		投手	40	難戦	40
地球ぎ	81	登場	(24)		
畜産	51	冬みん	89	にいがた(県名)	84
千島	82	とがめ(ながら)	66	にげのびて(る)	(44)
超人的	36	とぎすまされた(す)	(44)	にごり点	13
長男	49	ときわぎ	76	日夜	45
長編文	98	特質	19	にぶかった(い)	41
		特色	4	ニューヨーク・	
つぐなわれて(る)	52	ドクター・		ジャイアンツ	33
つつましかった(い)	127	エスベラント	16	ニューヨーク・	
つぶやく	72	特徴	16	ヤンキース	26
		土質	46		

入学式	105	ひきょう	63	復興	45
		ヒグラシ	(34)	フットボール	31
ねいろ	(40)	ひしひし(と)	95	ふなべり	10
根こそぎ	83	ひたすら	21	不毛	46
熱帯	80	ひたむき	37	冬ごもり	86
ねばり強い	(37)	筆者	17	プリント	55
ねゆき(根雪)	84	ビップ	34	プレイ	28
念願	37	美点	32	フレデリック	49
		ひところ	91	文語体	5
ノース・ウエスタン		ひとしく	24	文集	49
	87	ひとりじめ	49	文体	8
能率	19	百科	17	分類	4
		ひょうきんもの	(24)		
バイオリン	(17)	ひょうご(県名)	84	ベールース	27
ハギンス	33	びょう写	5	—平方キロ	84
ハコベ	60	広場	64		
はしゃぎ(ぐ)	108	品位	27	ポーランド	16
バック	109	ピンチヒッター	34	ぼいぼい	6
花がた	24			報道	20
花園	(41)	ファン	28	豊富	10
はなばなしい	34	風土	44	牧草	52
花輪	10	フォースアウト	34	ホワイト・ハウス	25
場面	(14)	ふきすさぶ	46	ほんの—	(31)
半旗	26	普及	17	マ—マ	(14)
番ぐるわせ	48	ふくい(県名)	84	まいぎぬ	(30)
はんもん	41	複雑	45	マグロウ	33
		ふくしま(県名)	86	まことしやか	64
ヒース	46	ふしあわせ	58	まずい	34
悲運	35	不断(の)	43	マッカーシー	40
ひがみ	29	不通	17		



眼科医	16	くじけ(ません)	74	小がら	(17)
感がい	42	くだらない	25	国際語	7
簡潔	17	ぐち	32	国士	20
歓声	108	クマバチ	(23)	心得て	4
寒帯	80	グラウンド	28	心構え	54
かんたく(する)	46	クリーブランド	36	古今	28
カンツバキ	77	くりひろげられて	14	ごさいなん(た)	(37)
かんとく	32	クロムギ	51	こじき	44
かんなくず	12	ゲーリッグ	36	こ高く	(16)
		敬愛	50	こだま(する)	115
ぎ式	22	経過	50	こだわらず	93
寄宿舎	31	けしからん	(43)	語調	9
技術	21	結末	10	コッペパン	104
基礎	16	ゲルマン語	16	ことがら	14
キツツキ	79	けん実	28	語尾	9
きつと(なって)	(44)	現状	24	コロンビア大学	31
ぎふ(県名)	84	原則	50	ザーメンホフ	16
キャプテン	40	コーラス	(44)	最高記録	40
休場	41	光荣	(40)	最深	86
起用	34	校歌	(45)	最北たん	82
強打	28	こうかい	67	さして	46
興味	24	高気圧	83	さすが	41
きよ大	21	口語体	5	サトウダイコン	51
きよみずやま	115	公式	42	さなか	76
議論	5	校正	99	さびれはてた	6
金言	8	後はい	38	さわむら	40
クーパースタウン	43	荒野	46	——産	47
空前	29	誤解	17	残念	34
苦境	28			山脈	86

シーウェル	36	植林	46	赤道	81
シーズン	35	除雪	93	接する	25
しが(県名)	84	諸民族	17	節制	30
司会者	(15)	しろうと	56	切望	31
シカゴ	87	新鋭	36	セネターズ軍	35
市長	26	人工的	16	せりふ	(14)
しつこい	46	深こきゅう	(24)	(対セネターズ)戦	35
失望	48	新人	35	選手権	33
シベリヤ大陸	83	しん台	90	全せい時代	33
シベリヤ鉄道	86	新婚旅行	40	全然	43
しめ具	91			セントルイス	
しめくり	94	水田耕作	20	・ブラウンス	34
社説	5	水力発電	93	全日本	40
収かく	51	スコア・ブック	36	先ばい	38
従順	48	すこぶる	35	戦友	27
しゅうぜん	(29)	すじかね入り	(37)		
修練	30	スズムシ	(17)	創案	17
主題	97	ずたずた(に)	(37)	創意	16
出場	29	す立つ	98	増進	17
守備	33	すてき	(40)	素質	49
シュレスウィヒ		ストーブ	80	早大	40
ホルシュタイン州	46	スランプ	30	卒業	94
じゅん真	29	すりむいた(く)	106	測候所	85
商業	31			ソテツ	113
上達	9	性格	28	そんぶん	62
小児まひ病	28	せいせい(した)	(35)		
証明	29	成績	35	対(セネターズ)	40
女王さま	(19)	勢ぞろい	(44)	大王(さま)	(24)
除外例	16	製本	99	大軍	(44)
しょく角	(17)	積雪量	86	退治	46



庫  
0  
68

広島大学図書

0130449668

